

小・中・都立学校

平成 4 年 度

教育研究員研究報告書

心身障害教育

東京都教育委員会

平成4年度

教育研究員名簿

部会名	地区	学校名	氏名	部会名	地区	学校名	氏名
教育課題	新宿台東中野杉並北板橋江戸川立川東久留米秋川	東戸山中	桑原 輝雄	教科(精)	渋谷豊島東大和多摩都立都立都立都立	長谷戸小	○喜多 好一
		西町小	海老沼 明			要町小	高倉 厚子
		中野本郷小	鈴木 洋子			第九小	高橋 美美
		桃井第二小	◎高木 京子			北永山小	野田けい子
		第二岩淵小	小島 久昌			町田養護	池亀 正夫
		志村小	○内藤 伸一			王子養護	高濱 隆
		本一色小	中村 祐子			江東養護	藤原 昌行
		第一小	菅原 真弓			足立養護	三島安見子
		滝山小	細井久美子			板橋養護	篠崎 友誉
		秋多中	榎 真幸			府中朝日養	◎杉野 学
教科(準)	世田谷調布日都立都立都立都立都立	若林中	木原 実	養護・訓練	大田板橋町都立都立都立都立都立	池上小	鶴岡奈津子
		調布中	若栗 文則			板橋第三小	○古澤 治子
		大坂上中	宇田川 修			町田第四小	小出 千尋
		葛飾盲	○原田 博子			品川ろう	米山田鶴子
		大塚ろう	栗山由利子			青鳥養梅丘	村松 信雄
		光明養護	小棚 嘉一			立川養	後藤 新平
		小平養護	椎名 久乃			しいの木養	鶴田真理子
		村山養護	◎江崎 安幸			調布養	◎国枝 孝行
		八王子東養	磯部たい子			多摩養	東川 修一
		大泉養護	宮下 洋子			白鷺養	竹本加代子

世話人◎ 副世話人○

担当

教育庁指導部 心身障害教育指導課 神尾 裕 治

目 次

<教 育 課 題>

児童・生徒の人間関係を育てる指導の工夫

- － 児童・生徒が自己を表現できるための教師の援助 － 2

<教 科 (準) >

一人一人の将来を見通した教科指導

- － 主体的に学習活動に取り組む力を育てる教科指導の在り方 － 18

<教 科 (精) >

一人一人が意欲的に活動するための指導の工夫

- － 見通す力を育てるための指導の在り方 － 34

<養 護・訓 練>

児童・生徒の障害の状態に応じた養護・訓練の指導

- － 『意思の伝達』の状態の改善のための指導 － 50

児童・生徒の人間関係を育てる指導の工夫

－児童・生徒が自己を表現できるための教師の援助－

I 主題設定の理由

教育課題分科会は、精神薄弱学級、情緒障害学級、難聴・言語障害学級、通常の学級と様々な学級担任で構成されている。各学級の児童・生徒の実態や指導内容も様々である。各学級や担当する授業における児童・生徒の実態を話し合ったところ、どの学級の児童・生徒も、周囲の人々への関心はあるが、どうはたらきかけてよいか、また、自分をどう表現してよいか分からない子供が多く、人間関係がまだ十分育っていないという共通の課題が出された。

その中で、私たちは、友達同士遊んだり、話したり、助け合ったりしながら、一緒にいる楽しさを児童・生徒に感じてほしいと考えた。人間関係を育てるための手立てが、様々な視点から出されたので、各自の資料を基に討議をし、研究授業を行い、研究の焦点を探った。

そこで、私たちは、「児童・生徒が自己を表現できる」ことが、人間関係が生じるきっかけを作り、育てていく一つの重要な要素であると考えた。

そして、自己表現ができるようになるための「教師の援助」の在り方を研究の重点とし、学級の実態を踏まえて考えていく中で、児童・生徒の変容を観察していくことにした。

自分の考えや気持ちを表現でき、お互いに相手を認め思いやることのできるような児童・生徒同士の人間関係が育つことにより、児童・生徒一人一人が生き生きと楽しく学校生活を送るようになり、豊かな心情が養われ、将来の円滑な社会参加につながるであろうと考え、研究主題を設定した。

II 研究の経過と方法

研究の経過と主な内容

5月	事前研究による研究主題の検討	9月	公開授業・協議会
6月	人間関係論の討議、主題設定の理由の検討、研究授業指導案の検討	10月	研究授業・公開授業 紀要プロットの検討と原稿作成
7月	第1回研究授業及び研究協議 指導の工夫の重点化	11月	研究授業・公開授業、研究報告原稿
		12月	作成、研究のまとめ
8月	人間関係についての資料読み合わせ 各自の指導案検討	1月	研究発表内容の検討、資料の作成
		2月	研究発表会

III 研究の内容

1 研究の重点化

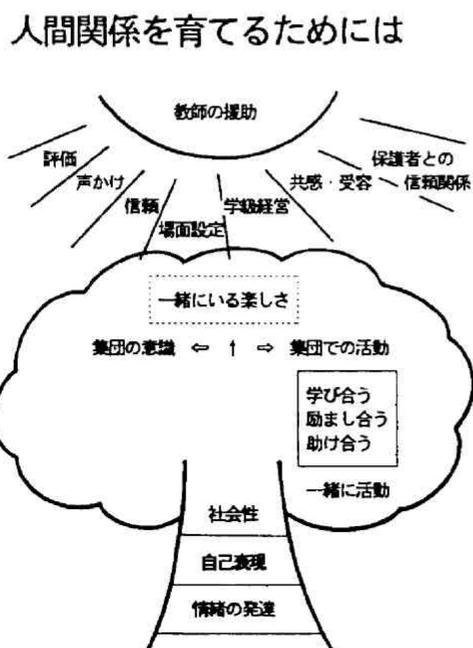
「人間関係を育てる指導の工夫」の中で、何に焦点を当てて研究を進めて行くかを考えるために研究授業を行った。

障害種別・ 教科・題材	精神薄弱学級（小学校） ＜体育科＞動物体操，スカイバルーンによるリズム運動，野球ゲーム
協議会の 要旨	人間関係を育てるための方向性について今後考えていく必要がある。 指導の工夫では，教材の選択，教師の姿勢，サブリーダーの動き，児童・生徒のかかわり方が考えられ，特に教師の援助の仕方や役割に焦点を当てる。

2 カード操作による考察と仮説の設定

研究授業や人間関係についての資料（幼稚園教育要領，人間関係論他）を読み，人間関係を育てる要素と自己表現できるための教師の援助について考察した。全員の意見が反映され，客観的な判断ができるとの理由から，カードを用いて整理し，仮説を立てた。

(1) 人間関係を育てる構造図……………人間関係を育てる要素を考察した構造図が左図である。



児童・生徒の人間関係を育てていくためには、「ともに活動すること」を通して、「個人が集団を意識」して学び合い，励まし合い，助け合う中で，「友達と一緒にいる楽しさ」を感じられることが一番大切であると考えた。そのために，「情緒の発達」「自己表現」「社会性」という3つの要素が幹となる重要な要因であると考えた。

そして，人間関係を育てるために必要な教師の援助とは，日々の学級経営の中で，「共感・受容」の姿勢をもち，子供との「信頼関係」を築き，必要な「声かけ」をして，励ます「評価」をすること，そして，子供が人間関係を作りやすいような「場面」を設けることであろうと考えた。

(2) 共通理解したこと

①人間関係を育てる指導の工夫の中で、自己表現を研究の重点とした理由

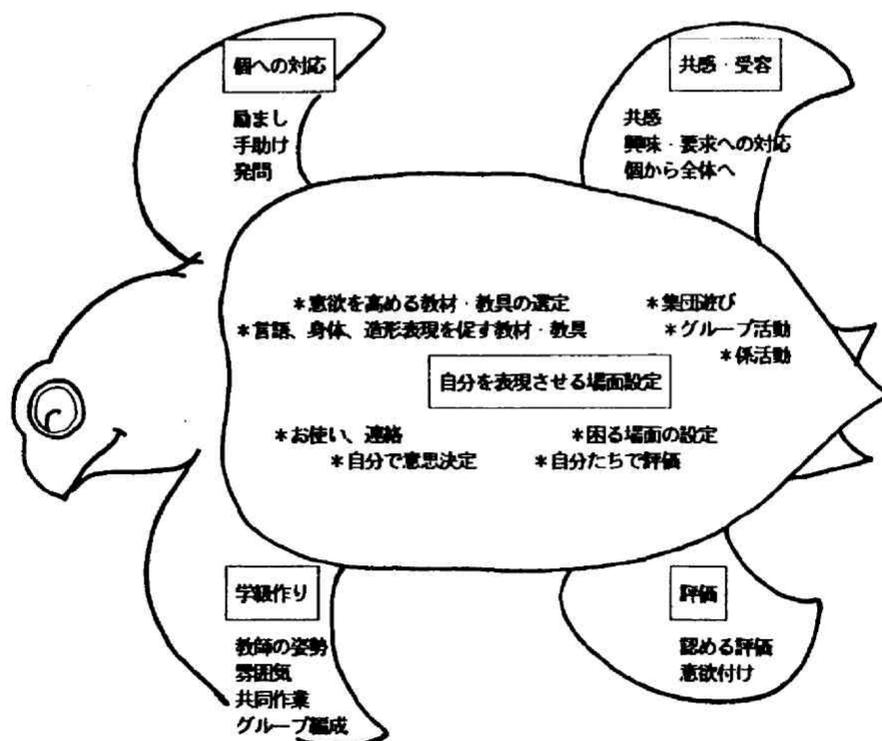
「情緒の発達、自己表現、社会性」の中で、学級や児童・生徒の実態を振り返ると、自己を表現することが少なかったり、表現の仕方が幼いなどの実態がある。そして、自己を表現することは、人間関係を生じさせ、育てていく重要な要素であると考えたので、研究の重点とした。

②自分を表現するとはどういうことか（定義）

単に言葉によるコミュニケーションだけでなく、言葉、文章などの言語表現をはじめ、身振り・動作、音楽への反応、リズム・踊り・模倣といった身体表現、絵や工作といった造形表現を含めて、他の人に意図的に伝える児童・生徒の表現にとらえる。

③児童・生徒が自己を表現できるための教師の援助

自己表現できるための教師の援助」構造図



次に、児童・生徒が自己を表現できるための教師の援助について考え、構造図としてまとめた。教師の援助の中では、「自己を表現させることができる場面設定」を工夫することが、授業や日常の学校生活の中で重要なことととらえた。この場面設定には、主に教材・教

具の選定にかかわること（意欲的に取り組める教材・教具の選択，言語表現・造形表現・身体表現などを促す教材・教具，集団遊び，グループ活動）や，主に教師の意図的な指導に關すること（係活動をさせる，困難な場面を意図的に設定し，児童・生徒に意思決定させる，自己評価など）がある。そして，教師の援助は，場面設定を支える日常的な指導で児童・生徒への適切な対応が大切であると考えた。

具体的な指導としては，表現しやすい雰囲気作りを含む「学級作り」（学級経営），子供の状況に応じた「個への対応」，子供たちの表現，感情への「共感・受容」，今後の意欲を高める「評価」などが挙げられる。各々の学級の実態に応じて，これらの教師の援助が授業のどの場面で生かされ，児童・生徒が変容したかを把握することにより，私どもが考察した仮説を検証していくことにする。

IV 指導事例

以上のような考察と仮説の設定の共通理解をもとに，全員が研究授業を実施し，考察を加え，仮説を検証した。その中から，精神薄弱学級での2回の実践事例をここでは取り上げる。

1 A小（精神薄弱学級） 体育科の授業

(1) 指導案

①単元名 基本の運動（用具を操作する運動）「仲よくキャッチボール」
ゲーム 「5組ボール」

②単元のねらい

「仲よくキャッチボール」	
技能	○ボール（バスケットボール）に対する意識をもちながら，ボールの操作を正確に行う。
態度	○友達の動きをよく見て，思ったことを発表する。

「5組ボール」	
技能	○バスを中心とした攻め方の工夫をしながら，ゴールヘシュートする楽しさを味わう。
態度	○チーム分けや作戦などをみんなで話し合いながら楽しくゲームをする。

③学級の実態

8名とも友達と一緒に活動する楽しさは感じている。集団での活動においては助け合ったり，励まし合ったりする場面が見られる。体育の授業においても，教師が意図的に「友達の動きをよく見る」「友達のよい点を探す」といった点を重視して指導している。各々の子供たちがお互いの個性を認め合い，協力して行動していこうとする意識がもっている。5名は自分の気持ちを言葉で伝えることができるので，今年度から係や当番の活動を複数で行わせたり，グループ分けなどを児童が話し合って決める機会を多くもつようにした。しかしまだ，相手のことを考えて行動できる場面は少ないので，指導中である。

④単元について

「キャッチボール」は，技能的な向上のみをねらうのであれば，同程度の技能の児童が組んで行うことが有効である。しかし，「仲よくキャッチボール」では，組み合わせを児童に任せ，相手が捕れるボールを投げることをねらいにしているので，相手によってボールの投げ方をかえなければならない場合が出てくる。これは，相手のことを考えて行動（表現）を工夫するという点で，人間関係を成立させようとする自己表現（身体的表現）であると考えたからである。

「当たったら捕りに行けボール」は，バスケットボールの一場面を取り上げてゲーム化したものである。様々なチームを作ることができるため，チーム作りのための話し合いの場を設定することができる。また，仲間と競争する場を設定することにより，児

童の意識を「よりよい動き」に注目させることができるのではないかと考えた。

「5組ボール」はバスケットボールの「シュートが入ったときの嬉しさ」、「味方にパスを通ったときのおもしろさ」を学級の児童にも味わわせたいと考えて設定した単元である。作戦を立てる場面では、勝つという目的があるので、児童の積極的な話し合いになり、自己表現の機会になると考えた。運動技能面での違いもあり、児童同士で作戦を立てていくことは難しいが、教師がかかわっていくことにより、お互いの力を認め合いながら物事を進めていく態度を育成していくことを意図している。

⑤本時の指導

・本時のねらい

基本の運動「仲よくキャッチボール」	
技能	○相手が捕れるようなボールを投げる。
態度	○友達のボールを受けて考えたことを発表する。

ゲーム「5組ボール」	
技能	○チームメートと協力して攻め方の工夫をする。
態度	○チーム分けや作戦などをみんなで話し合う。

・展開

(★→主指導者・☆→補助指導者)

学習内容	教師の援助	自己表現に関連した教師の援助	児童の活動
<ul style="list-style-type: none"> ○集合し、整列する。 ○あいさつをする。 ○本時の学習内容を知る。 ○準備運動をする。 ○5組体操をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習の流れを知らせて意欲をもたせる。 ○★はN. D.を中心に指示し、☆は、それ以外の児童の指導を行う。 ○教師も児童と一緒に5組体操を行うが、全体も見回す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童の代表に準備運動の号令をかけさせる。 ○警段決まっている組み合わせを変えて、5組体操を行わせる。 ○お互いに合図しながら、2人組の運動を頑張るように声をかける。 ○隊形が変わる時には、友達の位置を確認させ、ぶつからない位置に移動するよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○号令をかける児童は、的確に指示をする。できていない友達には個別に指示をする。 ○2人で合図をしながら行う。 ○2人組の時には2人で合図をしながら、または1人で位置を決める。
<ul style="list-style-type: none"> ○「仲よくキャッチボール」をする。 ・キャッチボールの相手を決める。 ・キャッチボールをする。 ・相手を替えて、キャッチボールをする。 ・話し合う。 		<ul style="list-style-type: none"> ○児童同士で相談して決めさせる。 ○友達の捕れるようなボールを投げるよう声をかける。 ○前回と違う相手になるように声をかけ組み替えをさせる。 ○みんなを集め、話し合いをさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○6人で集まり、チームを決める。 ○相手を確認して、ボールを投げる。 ○相手によって、投げるボールを変えてキャッチボールをする。 ○友達が頑張ったところや自分の感想を発表する。またそれを聞いて拍手する。
<ul style="list-style-type: none"> ○「当たったら捕りに行けボール」をする。 ・2人組のチームを3つ作る。 ・ゲームをする。 ・話し合いをする。 ○「5組ボール」をする。 ・用具の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○★は司会役になる。☆は児童の発表したことに積極的に同意する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童同士で決まらないようであれば助言し、納得いくまで話し合わせる。 ○審判のチームには、よい動きを見つける仕事もあることを確認させる。 ○発表しやすい雰囲気をつくり、発表したことは認めてあげるようにする。 ○力を合わせて用意するよう促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ボールを良く見て素早く捕りに行く。 ○ゲーム終了毎に審判に判定をさせ気がついたことを発表させる。 ○気が付いたことを発表したり、人の模倣をしながら答えたりする。 ○友達に声をかけ合いながら、力を合わせて用意する。

<ul style="list-style-type: none"> ・チーム分けをする。 ・今までのルールについて確認する。 ・今まで頑張ってきたことを発表する。 <p>5組ボール(前半)をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感想を言う。 ・作戦会議をする。 <p>5組ボール(後半)をする。</p> <p>○学習のまとめをする。</p>	<p>○表を使って確認させる。</p> <p>○最後に表を使って確認させ、本時の自分の目標を決めさせる。</p> <p>○★は審判役、☆は児童のプレーの良い動きを見つけ誉めたり、個別の指導をする。</p> <p>○★と☆は、2つのチームに分かれ、児童の意見をまとめながら作戦会議を進める。</p> <p>○★は、個々の目標とチームの目標に対する感想を分けながらまとめをする。☆は児童の発表したことに積極的に同意する。</p>	<p>○児童で相談して決めさせる。</p> <p>○児童によってルールが異なることの確認をする。</p> <p>○設定できない児童には、何を頑張ればいいのか友達に言わせ、本人には確認する。</p> <p>○チームのメンバーを活かした有効な攻め方があったら、皆の前で認める。</p> <p>○前半のプレーの感想を言わせる。</p> <p>○チーム毎に作戦を立てさせる。</p> <p>○十分に活動できない児童については同じチームの児童に声をかけ、活躍できる場をチームの中で考えさせる。</p>	<p>○各々で自分の目標を設定する。</p> <p>【ゲームの中での児童の動き】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●パスをもらいたい時は名前を呼ぶ。 ●ボールや友達の動く方向に動く。 ●ボールや友達の動きを良く見て、有効なパスをする。 ●パスのカットをしようと頑張る。 ●ゴール前でパスをもらいシュートしようとする。 <p>○頑張ったところを発表する。</p> <p>○前半の様子から、自分たちが頑張りたいことを発表する。</p> <p>○作戦会議で話し合ったことを頑張る。</p> <p>○頑張ったところを発表する。</p>
<p>○学習のまとめをし、次時の予告をする。</p> <p>○整理運動をする。</p> <p>○あいさつをする。</p>	<p>○各々の頑張ったところを誉め、次回への意欲を高める。</p> <p>○★は体育技能面での評価を行い、☆は人間関係面での評価を行う。</p>	<p>○指示を児童にさせる。</p>	

・評価

基本の運動「仲よくキャッチボール」			
技能	○相手が捕れるボールを投げることができたか。	態度	○友達のボールを受けて考えたことが発表できたか。
ゲーム「5組ボール」			
技能	○チームメートと協力して攻め方の工夫をすることができたか。	態度	○チーム分けや作戦などをみんなで話し合うことができたか。

(2) 協議会における考察

①教師の援助と児童の自己表現の様子

この授業では、ボールゲームを通して、児童が考えたり、選択したりする場面を設定し、児童に解決の方法を探らせた。その中で、児童の自己表現として、主に、自分の思いや気持ちを自分の言葉で表現させることをねらいとした。

具体的にはチーム分けのときや、ゲームのルールを考えるとときに、児童の意見を聞き、基本的に受け入れていくことにした。教師の発問も、「その時、どう思った?」「どうして?」など、児童の言語表現、感情表現を引き出すものが多かった。

リーダー的な児童があいさつや準備運動のときに、自分の役割を意識して行動し、友達にはたらきかけることができた。また、チーム分けを自分たちで話し合っただけで決めたり、作戦会議をしたり、感想を言ったりするなど、言葉による自己表現が多く出ていた。友達と組んで体操をしたり、チームプレーをしたりすることにより、友達を意識した行動も多くみられた。例えば、2人1組の活動では、友達の声かけに応じて動いたり、相手を選んでボールをパスしたりする行動が見られた。

体育の授業でも、自分の思いや気持ちを自分の言葉で表現できるように取り組んできた。以前は「先生、これどうするの?」と教師を介して話し合いをしていたが、友達の良いところを認めて話し合いができるようになってきた。日常生活においても、児童同士で進んで話し合いの場をもつなど、学級の集団としてまとまりができて、人間関係が深まってきている。

②考察

この授業では、児童が話し合う場面を多く取り入れていた。しかし、話し合った内容が、成果としてその後の授業の展開に生かされていたかについては、まだ十分評価できていない。児童にとって、話し合いが目に見えた具体的な成果となって、意欲に結びつけられるような教師の援助が大切である。そのためには、相手に伝わりやすい内容、表現の仕方を学び取らせる必要がある。少ない言語表現しかできない児童に対しては、教師が適切に表現した言葉に直して、全体に返していくことを心がけるべきである。

また、子供たちを受容していくことに関しては、何をもって受容とするか、今後検討する必要がある。例えば、児童に意見を最後まで言わせるだけでよいのか、受容するということは、言動に現れてきた部分だけを受け入れていくことを意味することなのかなどの点である。

さらに、教師が、児童の言動をどのように受け入れ、全体に返すことが望ましいのか、また、児童の意欲に結び付いていくような自己評価のさせ方とはどんな援助をすれば良いのかなどが、課題として挙げられた。

2 B小(精神障害学級) 遊びの指導の授業

(1) 指導案

①単元名 カード遊び(神経衰弱)をしよう

②単元のねらい

- ・ゲームの方法を理解させ、みんなでゲームをする楽しさを味わわせる。
- ・自己表現をさせながら他の児童との人間関係を深めさせる。

③学級の実態

1学年から8学年まで計8名の児童が在籍している。ほとんどの児童が日常的なことであれば言語指示が理解できる。情緒的には比較的安定していて、こじんまりとまとまっている。大人の援助があれば簡単な集団遊びを全員ですることができる。

しかし、個々の対人関係の発達段階をみると、まだ自己中心的で、周囲のことに関心をもったり、相手の気持ちを考えて行動したりすることが苦手である。

児童同士のかかわり方をみると、

- ・自分に逆らわず自由になる児童と一緒にいたがる。
- ・他の児童のしゃべり方やちょっとしたしぐさを真似する。
- ・ちょっと叩いたり、触ったりして反応を楽しむ。

このようなパターンがある。このように、幼いレベルではあるが、他の児童と何らかのかかわりがもてる児童が多い。

④単元について

「神経衰弱」は、同じ絵のカードが出ればもらうことができるという簡単なゲームである。このゲームに勝つためには、自分以外の人がカードをめくっている時によく見ていなければならない。常にめくっている人を意識し注目させることができるのではないかと考えた。

また、カードが合った時に「やった!」とか「うれしい」「すごい」と言ったり、カードが合わなかった時に「ごんねん」とか「〜だと思ったのに」「くやしい」と言ったりするなど、喜びや悔しさを自発的に表現できる場面が多くあると考えた。

さらに、チーム対抗戦にすることにより、激励、協力、共感などの気持ちを表現する場面も生まれると考えた。自分が取れなくてもチームとして勝てることもあるので、満足感を与えることのできる機会が多くなるのではないかと考えた。

⑤本時の指導

・本時のねらい

ルールを理解してゲームをする。

カードが合った時、合わなかった時の気持ちを何らかの形で表現する。

チームの仲間と協力して楽しくゲームをする。

・展開

学習内容	教師の援助	自己表現に関連した教師の援助	児童の活動
<ul style="list-style-type: none"> ○あいさつをする。 ○神経衰弱ゲームをして遊ぶことを知る。 ○チーム分けをする。 ○コーチ紹介をする。 ○チーム内の順番を決める。 ○ルールの確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教師の目を見るように促す。 ○「楽しく遊ぼう」と盛り上げる。 ○補助の教師がコーチとしてチームに入る。 ○ジャンケンで決めるようにアドバイスをする。 ○約束表を示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分で決められない児童を誘うように他の児童に声かけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日直が号令をかける。 ○礼をする。 ○赤チーム、白チームのどちらがいいか自分で言う。 ○3つの約束を言う。
<ul style="list-style-type: none"> ○「神経衰弱」の準備をする。 ○先攻を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「ジャンケンマン」を決 	<ul style="list-style-type: none"> ○カードがいつもと違う学芸会の配役カードであることを話し、「自分のカードは取ろう」と意欲付けながら示す。 ○発表の後、学芸会で頑張ったことを誉める。発表できない児童については、教師の質問に答えさせたり、他の児童に言ってもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○カードを見る。 ○絵カードを見て言う。 ○自分の配役カードが出たら手を挙げる。 ○学芸会について話す。 ○カードを受け取る。 ○カードを好きな場所に置く。 ○各チーム「ジャンケンマン」を出

	めさせる。 ○ジャンケンの勝敗を言う		す。
○「神経衰弱」をする。 ○ゲームの判定をする。	○どちらが多いか、並べながら教えさせ、比べさせる。	○コーチは相手のめくったカードをよく見ることや、チームメイトには教えてあげるように話す。 ○コーチは一緒に喜んで嬉しがったりする。	○順番にゲームをする。 ○自分が取れた時に喜び、取れなかった時には残念がる。 ○チームの仲間が取れた時は喜び、取れなかった時は残念がる。 ○チームの1番の児童がカードを並べ、みんなで数える。 ○勝ったチームは万歳をする。 ○負けたチームは拍手をする。
○2回戦目の準備をする。 ○2回戦目をする。 ○ゲームの判定をする。	○どちらが多いか、並べながら教えさせ、比べさせる。	○配役カード以外に加えたいカードがあるか聞き、あれば加える。	○順番にゲームをする。 ○チームの1番の児童がカードを並べ、みんなで数える。 ○勝ったチームは万歳をする。 ○負けたチームは拍手をする。
○まとめをする。 ○あいさつをする。		○協力し合った点などを誉める。 ○他の子がめくっている時、よく見る必要があることを知らせる。	○先生の話を聞く。 ○次の時は、もっと取りたいと思う。 ○日直が号令をかける。

・評価

ルールを理解してゲームができたか。
ゲーム中の気持ちが表現できたか。
チームの仲間と仲よくゲームができたか。

(2) 研究協議会記録

①教師の援助と児童の自己表現の様子

この授業は、絵カードによる神経衰弱のゲームをチーム対抗で行い、その中で、ゲームの楽しさを味わったり、自己表現をしたりしながら人間関係を深めるというねらいを設定した。特に、「自分の気持ちを表現すること」、「相手の行動に注目すること」を指導の重点として本時の展開を計画した。

具体的な教師の援助としては、まず第一に、神経衰弱という単純で分かりやすく、しかも自己表現する機会の多いゲームを選んだことである。そして、自分たちが頑張った学芸会の劇の絵カードを用意したことである。児童の「やりたい」、「取ってみたい」というゲームに参加する意欲を高めるための工夫である。第二に、本来は個人対抗のゲームをチーム対抗にすることによって、友達にカードの場所を教えたり、分からないときには聞いたりして、児童同士がかかわる場面を多くしたことである。また、同じチームの友達に対して、激励、協力、共感などの気持ちをもたせることにより、自己表現が多く見られるのではないかと考えた。第三に、教師は、常に児童の気持ちを受け入れ、一緒にゲームを楽しむことによって、自己表現しやすいような雰囲気作りを心がけた。

このような教師の援助に対して、発達段階や障害の状態が違う8人の児童が、全員45分間の授業を最後まで集中してゲームを楽しむことができた。また、自分の気持ちや意思、友達へのはたらきかけを言葉や動作、表情に表して、さまざまな自己表現をすることができた。例えば、児童は、カードが合うと素直に喜びを表現し、合わないと悔しさを言葉や態度で表した。また、チームや順番を決める場面では、自分の意思をはっきり言うことができていた。さらに、ゲームの中では、友達にカードの場所や順番を教えたり、励ましたり、共感したりする様子が見受けられた。

②考察

- ・児童の興味・関心に基づいた学芸会のカードを使ったことが、意欲を高め、ゲームを楽しませるために、有効であった。自分の好きな電車のカードにこだわるのではないかと心配されたT児も、学芸会の絵カードが気に入って、ゲームに積極的に参加していた。
- ・教師が、一人一人の児童を大事にし、普段の学級経営の良さが授業の中に出ていた。児童の実態（能力や適性、興味・関心など）がよく把握されていて、一人一人に応じた学習内容や発問が考えられていた。どの児童も、無理のない、自然な形での参加ができていた。
- ・授業の展開がテンポよく進められ、すべての児童が最後まで集中して学習できた。「ゲームを楽しむ」ことに重点が置かれ、その場面に絞っていた。
- ・児童が自己表現したことに対して、教師が共感・受容の気持ちをもって接していた。温かな雰囲気の中で授業が行われたので、児童はのびのびと自由に自己表現することができた。
- ・M児は、学級集団のリーダー的存在であるが、いつもは比較的自己中心的な言動が多い。しかし、今回の授業では、友達を意識したり、はたらきかけたりするなど、友達のことを考えた発言や行動が多く見られた。
- ・自分が加えたいカードを発表する場面で、M児は、隣の友達に自分の希望を言ってもらおうとはたらきかけた。このことは、社会性の面から見ると自己中心的であるが、自己表現という面だけを考えれば、何とかして自己表現して実現させたいという意欲の表れであり、周囲の友達を意識した行動と言える。

3 公開授業での実践記録

学級の実態に応じて、児童が自己表現できるための教師の援助を焦点化し、それぞれの学級や児童に対して、有効な場面設定や援助を検討した。

①小学校 精神薄弱学級	授業の 意図	比較的自己表現はできるが、人前で自信をもって表現できない児童→共感・受容の姿勢、意欲付け、雰囲気作りが焦点。
生活単元学習 <音楽劇> はらぺこ あおむし <手遊び歌> ウルトラマン のよまわり	場面 設定 教師の 援助	(身体表現) 1年生を招いて、劇を演じたり手あそび歌と一緒に歌って、自分らしい身体表現をさせる。 子供たちだけで協力して、劇や歌と一緒にさせる。 (共感・受容) 児童の自発的な発想や活動を認めつつ、自己表現が他の人に伝えられるように手助けをする。 (意欲) 児童が意欲的に取り組み、皆が課題とできる教材の選定。 (学級作り) 劇の衣装、道具、照明等の雰囲気作り。1年生の前で発表する等児童がのびのびと自己表現できる環境設定。
	児童の 自己 表現	・他の児童の動きを模倣した表現もあったが、自分らしく楽しく歌ったりして、生き生きと活動していた。 ・交流活動を通して、自分の言いたいことを表現しつつ、子供同士の自然な交流ができた。

②小学校 精神薄弱学級	授業の 意図	周囲の児童に対しての自己表現が少なく、友達関係を育てにくい児童→全員で力を合わせる場面設定、発問の工夫、意欲に焦点。
体育科 <ボール リレー> <鬼ごっこ>	場面 設定 教師の 援助	(問題解決) 困った場面で自分なりに考えたことを発表する。 友達の話聞いて考えを深める。 (共同作業) 声をかけ合って、いっしょに活動する。 (個への対応) 発問の工夫=具体的でわかりやすい問題提示。 一人一人の考えを大事にする。 (評価) できた点、努力した点を認めて誉める。児童同士でも相互評価させ、友達の頑張った点を認めさせる。具体的でわかりやすいめあてをもたせ、自己評価させる。
	児童の 自己 表現	・自分の問題としてよく考え、友達の話も聞いた上で、自分の考えを積極的に発表できた。 ・手伝ってもらいたいとき、自分から声をかけることができた。 ・自分から意思表示し、行動で表現することができた。

③中学校 精神薄弱学級	授業の 意図	比較的理解力があるが、経験が少なく自信がもてない生徒→場面 設定・個への対応・雰囲気作りに焦点を当てた。
生活単元学習 <宿泊学習> (移動教室) ・持ち物調べ	場面 設定	(言語表現) K. T君が司会役となり、問いかける場면을意図的 に設定した。 (教材の工夫) クイズ形式や持ち物表の工夫で意欲をもたせた。
	教師の 援助	(個への対応) K. T君の気が付かない部分をさりげなく助言し 表現力(言語)をさらに伸ばし自信をつけさせる ようにした。
	生徒の 自己 表現	・K. T君は授業が進むにつれて、表情も和らぎ、言語表現も活 発になってきた。 ・全員に質問ができ、皆の前で話すことに少し自信がもてたよう だった。

④中学校 通常の学級	授業の 意図	友達と協力して作業する時に、自己表現が苦手な生徒 →班活動、グループの工夫、評価に焦点を当てた。
美術科 <絵画> 共同制作によ る壁画作り	場面 設定	(班活動) 私的なグループだけでなく、作品の中での「隣り組」 やテーマ別グループを作り、その中で話し合いをする 場面を多く設定した。
	教師の 援助	(学級作り) ・グループの工夫 ①好きなもの同士で授業を開始する。 ②制作班、テーマ班など班を作り替える。 ③生徒同士ではかかわりをもてない時は、教師が加 わり相談させる。 ・雰囲気作り 発表会で展示、評価し共に喜ぶ。 (評価) 作品の良いところをみんなの前で誉める。
	生徒の 自己 表現	・教師の言葉がけをきっかけに、生徒同士が活発に話し合い、気 持ちを伝え合って作品を作っていた。 ・H君は、授業のはじめに、教師が作品の合わせ方を示すとその 後2～3回自分で合わせに行った。

⑤小学校 通常の学級	授業の 意図	学級活動の話し合いの仕方が分かってきた1年生→ 言語表現教材、共感・受容、個への対応に焦点を当てた。
学級活動 <話し合い 活動> 「おみせやさん ごっこを しよう」	場面 設定	(言語表現) ・「だれが何屋さんになるか」を議題にして、どの =発表 ようにして決めたらよいか、自分がやりたい店を 決める等を話し合う。
	教師の 援助	(共感・受容) 頑張って発言した友達を発表して拍手する。 少数意見も大切にしなければいけないことに気付 かせる。 (個への対応) 話し合う内容を事前に知らせ、自分の考えをまと めさせて、安心して発言できるようにする。 (意欲) 興味・関心のある議題を選ぶ。
	児童の 自己 表現	・自分の考えをカードに書いたり考えを発表したりして活発な学 級活動であった。 ・友達の意見に対してうなずきなどの身体表現をしていた。 ・友達の意見に対して、賛否の意見を言っていた。

⑥小学校難聴 言語障害学級	授業の 意図	なめらかに話せない不安から、自分の気持ちや考えを表現できに くい吃音の児童→遊びを通して言語表現、発問の工夫に焦点
養護・訓練 <遊びの 指導> 野球遊び 物当て遊び なぞなぞ遊び	場面 設定	(言語表現) 自発語や感情表現を伸ばすために、対象児の興味のある 野球遊び、短い語句で表現できるような物当て 遊び、韻律文を応用した流暢な音読をさせる。
	教師の 援助	(発問工夫) その時々吃音の状態に合わせて、児童が短い語句 で応答できるように話しかけの工夫をする。 (共感・受容) 話しかけてきたときに、じっくり聞く。 (意欲) 流暢に読める意識をもたせ自信をつけさせる。
	児童の 自己 表現	・バットに当てたり、遠くへ飛ばしたりすることができると表情 が緩み、自発語が増えた。 ・名称が分かると笑顔が見られ、話そうとする意欲も起こり、声 も大きくなる。

⑦小学校通級 情緒障害学級	授業の 意図	発達段階に比べて、自信がなく自ら自己表現できにくい児童 →場面設定（教材の工夫），個への対応に焦点を当てた。
養護・訓練 <ゲーム> ・おねがい トランプ ・タオルかけ ゲーム	場面 設定	（教材の工夫）個への対応に焦点を当てた。 （集団遊び）ゲームの中で、子供同士でなければ解決できない場面を設定。ゲームの新ルールを話し合って作る。
	教師の 援助	（個への対応）子供同士の話の整理をする。話し合いの時に、皆に分かる言葉に直し、全員に返す。 自己表現できにくい児童には、言葉を引き出す声かけをしたり、自己表現を待つ。 （共感・受容）子供の興味に教師が合わせ受け入れる。
	児童の 自己 表現	・リラックスしていて感想や感情が素直に出ていたが、おどけるような自己表現はどこまで認めるか。 ・他児の言葉や動作に刺激され、繰り返している児童がいた。

⑧小学校通級 情緒障害学級	授業の 意図	規制されることを嫌い、集団で活動することが苦手な友達とかかわるより一人を好む児童→場面設定，個への対応が焦点。
養護・訓練 <ゲーム> ・カルタ ・花いちもんめ	場面 設定	（言語表現）カルタを児童自身の言葉で作らせ、発表させる。 一緒に遊んで欲しい先生を誘いに行かせる。 （集団遊び）遊びの中で、自然に話し合って決めたり、譲ったり我慢したりするという経験をさせる。
	教師の 援助	（個への対応）カルタの文を作るとき、先生を誘いに行くときに一人一人の児童の能力にあった援助をする。 （教材の工夫）児童が興味・意欲をもてるような身近な友達や先生の写真を絵札に使う。 （共感・受容）教師も一緒に楽しく遊ぶ。「誰が欲しいか」を決める話し合いがうまくいかない時は助言する。
	児童の 自己 表現	・カルタを選ぶときに、じゃんけんをしたり譲ったりしていた。 ・「誰が何をしているか」自分の言葉で作った。 ・友達がじゃんけんするとき一緒に楽しめた。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本分科会は、どのような場面を設定すれば、より多くの自己表現を引き出すことができるのか、また、どのような教師の援助をしていけばよいのか、という2点について、授業研究を通して探ってきた。その結果「自己表現させるための教師の援助」に関する構造図で示した仮説は、概ね有効であると思われる。次に成果について述べる。

<自分を表現させるための場面設定>

- ・楽しかった行事や、集会・移動教室の事前学習など、興味のある題材を取り入れることによって自分の気持ちや考えを人に伝えようとする意欲が高まった。また、ゲームやリレーなどの教材は、勝ちたいという目的がはっきりしているため、皆で協力したり、話し合ったりしようとする意欲が高まった。
- ・自分の気持ちや意思を相手に表現しなければならない場面（ゲームのチーム分けや自分で作りたいカルタを決める場面など）では、友達と譲り合ったり、話し合っただけで決めたりするなどの経験が自然にできた。

<教師の援助>

(1) 共感・受容

- ・児童・生徒の表現が幼く、他者に理解できないときに、教師が相手に伝わりやすい表現にしたり、まとめたりすることにより、安心感がもて、教師への信頼感が生まれた。
- ・児童・生徒が喜びや悲しみを表現したときに、共に喜び、悲しむことで一体感がもてた。

(2) 学級作り

- ・先生や友達と一緒にいて楽しいと感じることのできる学級作りが大切であることが分った。
- ・児童・生徒がのびのびと自己表現できる雰囲気やお互いを認め合い、思いやることのできる集団作りが、自己表現させる意欲を高めた。その結果、児童・生徒が自分の気持ちを相手に伝えようとするようになっていった。
- ・学級での学習の約束を徹底させることにより、落ち着いて学ぶことができるようになった。

(3) 個への対応

- ・事前に、一人一人の児童・生徒の予想される動きや反応を十分考え、教師の援助を探ったことにより、授業の構造・流れが明確になり、きめ細かな対応ができた。
- ・全体への発問では理解できない児童・生徒には、個別に補助的な援助をする必要があり、サブリーダーの役割も検討された。

- ・聴覚的な情報処理が不得意な児童・生徒に対しては、板書、絵、図などの視覚的な情報を補助教材として用意することが大切である。
- ・個人の実態に合わせてルールを変えるなど全員が意欲的に活動できるよう配慮した。

(4) 評価

- ・みんなの前で良いところを認めることにより、次時への意欲を引き出すことができた。
- ・次の活動の仕方や気を付ける点が、具体的に分るような評価が大切である。

2 今後の課題

11回の授業実践を通して、自己表現をさせる場面を学級や児童・生徒の実態に応じた形で設定して研究を進めてきた。人間関係を育てるために自己表現を伸ばすことを研究の焦点に設定したが、多くの課題が残された。

- ・自己表現について共通理解したが、比較的広義な段階に留まってしまった。児童・生徒の自己表現は、人に伝えたい、理解して欲しいという意欲が高まったときに表出されるものであるから、そのような意欲を積極的に引き出す教材・教具を作ることが大切であろう。
- ・場面設定が同じでも、通常の学級や障害種別によって、具体的な教材・教具や授業の中での取り上げ方が様々であった。
- ・教師の援助については、場面設定を含む教師自身のいろいろな工夫を検討することができたが、何を焦点としていたか、どのような援助が望まれるのか、それぞれの学級の実態や教師の工夫に留まるところがあった。
- ・教師の援助の中でも、特に、共感・受容という言葉が多く出てきたが、果たして何をもちて共感・受容とするのか、どこまでどのような形で受容していったら良いかは課題として残った。
- ・児童・生徒を認め、意欲をもたせる評価のあり方や評価のタイミング、自己評価、相互評価のあり方も今後更に検証していく必要がある。
- ・自己表現できるための教師の援助の構造図には項目として入っていなかったが、「児童・生徒の意欲」を喚起することに教師の力が多く注がれていた。児童・生徒の意欲をどのようにもたせるかは、最大の課題と言える。

一人一人の将来を見通した教科指導

－主体的に学習活動に取り組む力を育てる教科指導の在り方－

I 主題設定の理由

本年度構成された「準ずる教科」部会は、盲学校、ろう学校、肢体不自由養護学校及び中学校精神薄弱学級を担当する教員10名で年間の研究を行った。

昨年度の研究を受け、各学校及び児童・生徒の障害の種別や障害の程度の実態把握に基づき研究の方向を探った。中でも教科学習における、意欲的に学習する力、主体的に学習する力など、障害の種別や程度を越えて必要な能力を、どのようにつけていくかを中心に議論を重ねてきた。それらの力が、一人一人の将来を見通した教科指導に繋がると考えられるからである。心身の障害の有無を問わない教育課題であるが、特に、心身障害教育においては、児童・生徒の障害や障害に伴う様々な要因による意欲や主体性の脆弱さが、将来のたくましい生き方に対する大きな課題といえる。そこで、各自の実践事例を基に児童・生徒が受け身でなく、自分が今何をしているのか、これから何をしようとしているのかを解る学習の場を具現することをめざして研究を進めることにした。それにより児童・生徒が適切な自己理解を通して、目前の学習の過程を見通し、ひいては、学校教育修了後の将来をも見通す力が育まれると考え、主体的に学習活動に取り組む力を育てる指導法を究明していくことにした。

「主体的に学習活動に取り組む」ためには、生活から発想された場において、児童・生徒自身が課題意識を持ち、見通しを持った学習活動に意欲的に取り組み、成就感を味わうための指導が大切である。そのために教師は、児童・生徒の活動を共感的に評価する事が肝要である。特に教科の学習においては、基本的な内容を重視しながら具体的な生活から発想した指導が将来の生きる力になると考え、その指導内容・方法を検討するために、上記の主題を設定した。

II 研究の経過と方法

1. 研究の経過と主な内容

月	内 容	月	内 容
5	研究主題の設定と問題点の整理	9	授業案の検討及び授業研究（算数）
6	各校実態把握及び基礎研究 指導事例の検討、学習意欲の考察	10	授業研究（保健保育）、授業研究（家庭）
		11	研究のまとめ、研究報告書原稿の検討
7	主題をどうとらえるかの検討	12	研究発表内容・方法の検討
8	主題に関わる概念の検討 国語授業を通じた事例研究	1	発表会準備と資料作成
		2	研究発表会

2. 研究の方法

(1) 基礎研究

① 研究主題の検討

各学校や学級の抱える課題は多様であるが、教科指導の充実・改善はまず学ぶ意欲を向上させること、そして、基礎・基本を大事にしながら、個性を生かし、主体的な活動を支えることを通して児童・生徒の主体性が育まれるという共通認識の上に立ち、協議を重ね、研究主題の共通理解を図った。

② 事例研究

今年度は、生徒の自主的な活動を重視し、見通しを持った教科学習の指導事例を検討し、その指導方法を追究した。

(2) 授業研究

各学校・学級の児童・生徒の障害の程度や指導目標及び内容を検討し、障害の特性を考慮しながら教科別に研究授業を行った。授業研究の指導内容と指導案作成の検討に当たっては、全体で討議し、共通理解を深めた。

III 研究内容

1. 主題について

「見通し」に関して、教師が児童・生徒の現状・将来を見通すと同時に、児童・生徒自身が、1単位時間、1日、1単元で、それぞれに何をしているかをある程度理解し予測できることとその概念を規定した。

2. 見通しを持った学習活動とは

児童・生徒にとっては、自分がその場において、何が必要であるかを自己認識できることから始まり、自らの課題に対しての取り組み、1単位時間への理解、その日1日・1単元への理解や予測を持てるなど、目標と現在の自分とがある程度結び付けられることである。

教師にとっては、1単位時間などの短期的なことから、卒業を見通して、現在どんな力を身に付けたいかが明確に捉えられていることが大切である。

3. 見通しを持てる学習活動の要因と阻害する要因

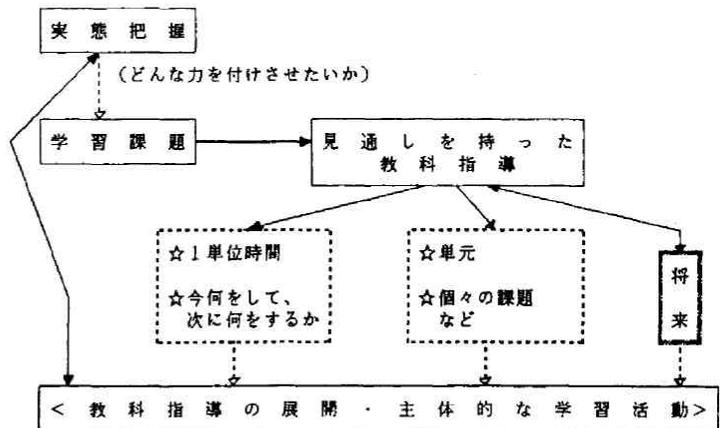
見通しを持った学習活動を展開していく上で、児童・生徒にも教師にも、より良く実践していける心理的・物理的要因があり、逆にこうすることによって児童・生徒及び教師も含めて、見通す力を拒んでしまう要因があると考え、児童・生徒及び教師の実態と学習の場をもとに分析した。次ページの表はその概要である。

さらに主体的な学習の成立状況にある過程を図に整理するとともに、児童・生徒が、それぞれの学習課題に対して「見通し」を持ち「主体的な学習活動」に取り組むようにするため、指導に当たっての具体的な留意点を列挙して実践研究に生かすようにした。

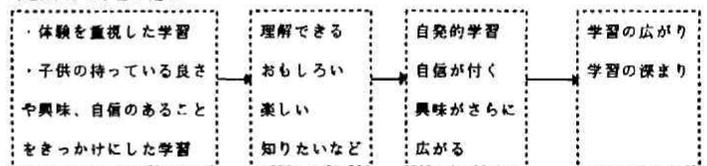
◎見通しを持って主体的に学習に取り組む授業のための留意点

- ・他の活動や日常生活に応用できる内容を多く含んでいること
- ・興味・関心を喚起させ、積極的に参加できる題材・単元であり、教材・教具がよく準備されていること。
- ・学習体験が、拡大発展させられるものであること。
- ・児童・生徒の学習課題に応じた内容が用意されていること
- ・生徒の学習の様子に適切に対応できること
- ・教材研究を十分に行うこと
- ・導入から展開、まとめまでをそれぞれの児童生徒に応じて押さえてあること、等

	児童・生徒が見通しを持つために	教師が見通しを持たせるために
促進要因例	<ul style="list-style-type: none"> ・その時間、その日、単元で何をしているかがある程度予測できる ・具体的な目標がある・楽しい経験である ・自分にあったステップがある ・完成の喜びが味わる など 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の現在から将来の目標を明確に持っている ・どんな力を付けさせたいかをはっきりさせる ・メディアを十分に活用する ・児童・生徒の身近なものを教材とする など
阻害要因例	<ul style="list-style-type: none"> ・学習したことが実生活と結び付かない ・それを行う必要性があまり感じられない ・興味が持てない など 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の発達段階、特性、生育歴などの把握が不十分である ・教材・教具及び授業の研究が不足している ・「～してはいけない」「間違っではいけない・恥ずかしい」という先入観を与えている など



◎主体的な学習の過程



4. 実践研究

A. 実践を通して指導案を改善し、指導法の明確化を図る。

教科指導の実践例を通して、対象児童・生徒の「見通し」や「主体的学習」の成立、学習指導の過程や指導法の是非について検討し、指導の改善に資する。

B. Aについての検討をもとに障害や発達段階等に応じた指導の工夫を図る。

改善の視点に基づき、多様な障害の種別や程度に対応した工夫を加え、実践例を蓄積する。

IV 指導事例

A ; 実践を通じた指導案改善の例

《数学科》（肢体不自由養護学校高等部）

1. 題材名 「わり算の指導」

2. 教科の特性と障害への対応

数学は生活上欠くことのできない基本的な教科である。学習指導要領では情報化社会の到来に応じ、生涯にわたって算数・数学を活用できるための必要な技能を習得し、数学的に処理する能力や積極的に活用する態度を育てることを目標としている。本研究の対象児は、精神薄弱を伴った肢体不自由児である。生徒の実態に即して「生活に必要な数量や図形に関する理解を深めそれらを活用する能力を一層伸ばす。」（精神薄弱養護学校高等部の数学の目標）ことに基づき、指導内容を組んでいる。

3. 学級の実態

生徒2名の構成、学力に差があり、課題に応じて個別の指導を行っている。典型的な肢体不自由の生徒と精神薄弱を伴った生徒との、異なったタイプの生徒の指導であり、それぞれの興味や意欲、発達に応じた指導内容を組む必要がある。

また、生活経験が十分でない、学習したことを実生活に生かす機会が非常に少ない、学習内容が定着しにくい、断片的細切れの知識で積み重ねができにくいなど障害の特性によるマイナス面があり、それらを補いながら指導する必要がある。

4. 研究主題に沿った対象児の指導

(1)対象生徒の実態

高等部1年 H男（15才） 障害名：脳梗塞による左けい性片マヒ、先天性心疾患。小学校の通常の学級を経て本校中学部より入学した。日常生活はほぼ自立しており、自主通学している。ひらがなの読み書き、簡単な漢字の読み、作文ができる。3位数以上の加減、か

け算の九九ができる。時間の概念・計算，長さの単位などを理解している。

学習に対する興味や意欲は薄い，手や道具を使う作業には興味を示し集中力がある。過保護や甘えによるルーズな面や，嫌なことは逃げてしまうなどのマイナス面もある。

(2)主体的に取り組む力を育てる工夫

①学習指導過程の工夫

学ぶことに対する意欲をどう引き出すかがH男にとっての大きな課題である。片マヒではあるが，作業的なことは集中できるので活動することを通して考えることを中心にし，つぎの三点に関して工夫した。

ア 解きたくなるような場面の設定

イ 生活の中の具体物，事実等を通した活動や考える場の設定

ウ 教え合ったり，学び合ったりするとともに，自分なりの思考・判断を通して発見していく学習指導過程の工夫

②教材・教具の工夫

生活の中の身近な物で，その形や大きさから，量的にも数的にも直観的に捉えやすいものとしてキャラメルを選んだ。キャラメルは手先を使う物として適当な大きさであり，箱に入れたり，数えたり，積み上げて高さを比べたりするなど，多様な操作が想定でき，数の処理に集中して取り組み，かつ確かめやすい素材として活用できる。

③成就感と評価の工夫

H男にとって，今何をやったのかが明確になるようにプリント（ノート）に書く，まとめる等の作業を行う。また，一つ一つの活動を大切に，その結果を自分の思考・判断を通し，自分の言葉で話すことによって位置づけるような活動を大切に，さらにできたことを共感的に認め，板書等で明確にしてやるようにした。

5. 指導の実際

(1)目 標

○四則計算の1つであるわり算の考え方について理解し，計算できる。

(2)学習指導計画

- | | | |
|------------|-----------|------------|
| ① わり算の意味 | ② 問題づくり | ③ かけ算との関係 |
| ④ 答えの求め方 | ⑤ 0のあるわり算 | ⑥ 余りのあるわり算 |
| ⑦ 筆算の仕方・練習 | ⑧ 問題づくり | ⑨ まとめ・練習 |

(3)展開

<題材>わり算の意味

<目標>・キャラメルなどを何人かで等分する活動を通して、わり算の意味を理解することができる

- ・興味をもって授業に参加し、集中して取り組める。
- ・学習の結果を見て、自分なりの感想・意見を発表できる。

6. 考察

授業では、生徒の活動もたくさんあり、集中して取り組むことができた。見通しをもてたか、主体的に取り組めたか、活動する場面があったか、成就感があったかなどの観点に基づき授業の検討を行った。

協議では、導入でわり算に対する期待感をもたせる、一つ一つできたことに対する評価をきちんとする、均等に分けるというわり算の考え方に導くための工夫をする、大きな数や余りのある分け方などいろいろな例があってもよい、という意見や、分け方(ランダム、

< 展開1 >

	学 習 活 動	予想される生徒の活動	指導上の留意点				
	これから「分ける」について勉強する。こんなことが分かるようになるよ。 「スポーツ大会で75人を3チームに分けるには1チーム何人か」「ジュース1を家族4人で分けて飲みたい。何 ずつか」		プリント提示。				
展 開	キャラメル12こを4人に分ける。どんなわけ方があるか。 作業の結果をプリントに記入する。 分け方について話し合う。 20個のキャラメルを5人で同じずつ分けてみよう。	<u>キャラメルを分ける活動</u> キャラメルと箱を用意 ① 1個ずつ分け、均等に ② パラパラに分ける <u>自分の結果を記入</u> <table border="1" style="width: 100px; height: 20px; margin: 5px auto;"><tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table> <u>自分の分け方について発表</u> Tの分け方も話し、討議する ・順番に1ずつ分ければよい ・適当な数ずつ分けてみる などの意見 <u>操作、記入</u> 前の話し合いを通して、分け方に変化がみられるか。					様子を見ながら、 ①②両方の結果が出るようにTも活動に参加する 自分なりに記入した後、左のような図に整理して書かせる。 いろいろなわけ方があるが、同じずつ分けることに注目させる。 具体的な操作の後に記入、一人あたりの量を確かめる。
ま と め	<u>全体の量を同じずつ分ける計算をわり算という</u> 12個のキャラメルを3人にわり算の考え方で分けてみよう。	<u>操作、記入</u> 3人に4個ずつ配る。	記入				

1つずつ、予想を立てる、など)について評価しながら丁寧におさえる必要がある、などの意見が出された。研究では、それらの意見をもとに、より主題に迫る指導案をそれぞれが持ち寄ることとし、それらを検討し、展開2のような指導案を考えた。

7. 展開2（考察を経て組み直した改善案）

	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	物を分けるということに関して学習することが分かる。	家庭や学校で分ける動作がどんな時にあるか考えてみる。 ・ お菓子、お金、を分ける ・ ゲームでチームに分ける	◦ いろいろな場面から経験を引き出す。 ◦ 分け方、誰とどんな風に等、多様に出てよい。
展 開	キャラメル12個を家族で分ける。 ・ H君の家族の場合 ・ 先生の家族の場合 ①②の分け方について説明できる。 ①に注目し、どんな分け方があるか考える。 20個のキャラメルを5人で同じに分ける。	①均等に分ける ②不均等に分ける ※ ①に分ける可能性が高い 結果をプリントに記入する a. 一つずつ分けていく b. 予想をたてて分ける 例題を出し、「同じに分ける」問題を解く。	◦ H君の分け方を見ながら、両方の分け方が出るよにする。 ◦ 家族の顔、キャラメルの絵カードを使い黒板に整理する。 ◦ 例題を通して、予想を立てて分けることに慣れさせる。
ま と め	全量をおなじに分ける計算をわり算ということが分かる 22個のキャラメルを3人に分けたらどうなるか考える。	プリントに記入する。 (余りがでてしまう、こと)	◦ 記号について知っているようであれば意味を説明する。 ◦ 次回へ興味をつなげる。

B ; A 検討を基にした各校実践例

《保健体育》（盲学校中学部の指導）

1 単元・教材名

保健分野 「思春期の心とからだ」

2 教科の特性と障害への対応

- (1) 保健体育として心身の調和的な発達を図り、生徒の障害の状態、発達段階、体力、健康状態、運動経験、興味・関心等を十分配慮し、生涯体育へ発展できるようにする。
- (2) 指導内容に当たっては、自己の身体に関心を持たせるために、体力、姿勢の現状を認識させ、正しい姿勢の大切なことを理解させる。また、各運動領域の指導と関連させながら、日常生活の中で積極的に運動を行う習慣が身に付くように配慮する。
- (3) 心身の機能と心の健康、環境衛生、障害や疾病の予防、健康と生活等を通して、健康の保持増進や安全について理解させる。
- (4) 自己の障害の認識、性に関する知識と理解については、他の教科・領域と関連させながら興味・関心を持たせるように配慮する。
- (5) 全盲生に対しては、墨字の点訳、立体コピー等を使い、理解しやすいように配慮する。
- (6) 弱視生に対しては、①墨字や図、表の拡大 ②教室内の採光と板書との関係 ③板書の筆圧 ④チョークの色や太さ等に配慮する。

- (7) 教科書や資料を見る姿勢がうつぶせの状態になりやすいので、できるだけ背中を伸ばした姿勢をつくる活動になるように配慮する。

3 本学級の実態

弱視生徒9名、全盲生徒1名の10名、弱視生徒の中には、将来的に光覚も失われるだろうと予想され、点字移行途上の生徒が2名いる。実際に墨字で行っている生徒7名、点字移行途上の生徒を含め点字の生徒は3名である。小学校普通学級から5名、弱視学級通級2名、盲学校小学部から3名の10名で構成されている。うち、男子9名、女子1名である。保健体育の授業に関しては、全体として体育実技は意欲的、積極的に授業を受けている。机上の学習になると、消極的な態度が目立つ。理解しづらい課題・単元には興味・関心を示すことが少ない。個々の知識、経験、体験が多種多様で焦点が絞れない感がある。また、国語、数学(算数)、理科、社会、英語の教科学習については、学年相応の学習グループ、小学校5～6年の学習グループ、小学校2～4年の学習グループの3グループに分けて授業を行っている。技能教科は、美術、技術・家庭科を2グループ、音楽、保健体育の2教科は学級全員で行っている。

4 対象生徒の指導

- (1) 主体的に取り組む力を育てる工夫

① 学習指導過程の工夫及び教材・教具の工夫

導入段階では、前時の復習の中で新生児と成人のからだの比較の確認をしながら「身体との出会い」の時期であることを意識させるため、身体各部の比率(カーンの資料)を紙模型を使い、一人一人具体的に比べさせる。(全盲生は机上、弱視生は黒板で行う。)

展開の段階では、第1次性徴と第2次性徴との違い、男女の違いを理解させる。また、個人差があることを理解させるため、友達同士お互いのからだを観察したり、キューピー人形、パパママ人形等を模型として使用し、違いを発表させる。次に、男女の教員を実際に触察することにより成人の男女のからだつきの違いを理解する。副教材として立体コピー、拡大図を使用する。

② 成就感と評価の工夫

ア 学習活動中の発問に対して、間違っているにもかかわらず自発的に答える、分からない事柄を分からないと言える、分からない事柄を質問できる等、自分で考え、自分の言葉で伝えることができることに対する評価。

イ 他人の発言、意見、説明を聞く態度に対する評価。

ウ 自分の認識と自分以外への認識が少しでもできたかどうかについての評価。

エ 挨拶ができることに対する評価。

オ 正しい姿勢が保てていたかについての評価。

上記の評価を通して分からないこと、間違えることが羞恥心に繋がらないように意見や発言に対して、授業内容を踏まえた上で自由に自主的に発言できるように、言葉掛けを行っていく。その中で自分の発想を否定的でなく捕らえ質問をする楽しさを知り、それを通して題材の内容を理解できた成就感、疑問を持ちながら学習をしていく成就感を味わえるように工夫し、配慮する。

5 指導の実際

- (1) 目標 ア 思春期（第2次性徴期）において男女のからだつきや生理面・心理面でどのような特徴があるかを理解させる。

イ 第2次性徴期の発現は、

子供を産み育てる大人のか
らだに成長していることを
理解させる。

(3) 授業展開（指導計画10時間中の4時間目）

- (2) 学習指導計画

1時間目；保健体育の授業
の保健分野のとらえかた

2～3時間目；からだの発
達と中学生時代の特徴

4時間目；第2次性徴の現
れとその意味

5時間目；第2次性徴のお
こる仕組み

6～8時間目；循環器・呼
吸器の仕組みと発達

9時間目；脳の仕組みと発
達

10時間目；精神の発達の仕
方

	指導内容	学習活動	指導上の留意点
講 入	前時のおさらい 本時の予告	身体各部の比率をカーンの資料 を紙模型を使い実際に比較する	全盲生は机上で行い、 弱視生は黒板を使用。
	<p>◎<u>男女のからだつきには、どんな変化が現れるか。</u></p> <p>1. 発問→説明； ・性徴の意味 ・第1次性徴と第2 次性徴の違い ・第2次性徴の発現</p> <p>2. 発問； ・思春期の男女の体 の違い</p>	<p>・性徴の意味について考える。</p> <p>・男女の体の違いを挙げる ・友達同士のからだを観察する ・キュービー、ババママ人形を 比較、観察する。 ・男女教員を使って、成人の男 女のからだの違いを観察する</p>	<p>・文字、言葉から意味を 考えて答えさせる。 ・思春期についての説明 ・第2次性徴の発現の意 味について考えながら 学習することを指示。</p> <p>・全員に発問する。一度 出た違いは使わせない。</p>
	<p>◎<u>生理面・心理面にはどのような変化が現れるか。</u></p> <p>3. 説明→発問； ・精通、初潮の知識</p> <p>4. 説明；性的な刺激と 生理的変化</p>	<p>・「精通、初潮」の用語及び意 味を知る。 ・知識の状況を確かめ合う。 ・理解の内容について発言する</p> <p>・3の説明を確認し、刺激と変 化の関係をつかませる。</p>	<p>・思春期になると男女 に特有の生理現象がお こることを説明。 ・挙手で知識の確認 ・自分の性別の自覚を高 め異性の存在を認識さ せる。</p>
	<p>◎<u>第2次性徴には、どのような意味があるのか。</u></p> <p>5. 発問 ・第2次性徴の意味</p>	<p>・成長の意味について考える。</p>	<p>(立体コピー拡大図使用)</p> <p>自分で考えた答えを、自 分の言葉で答えさせる。</p>
ま と め	◎本時の内容の確認。 ◎次時の予告	・理解できた内容と、理解でき なかつた内容を整理する。	時間内に終わらないもの は宿題としてノート整理

《家庭科》（ろう学校中学部の指導）

1. 教材 被服領域の指導〈題材 布の成り立ちと繊維の特性〉

2. 教科の特性と障害への対応

家庭科などの実技、実習を伴う教科は児童・生徒達にとって比較的取り組みやすい傾向があり、製作などでは中学校普通学級に優る生徒もいる。実習する具体物があることは、視覚に訴える刺激が大きいことであり、何をするかというイメージがつかみやすく見通しももてる。逆に言うと、抽象的な思考を伴う学習、意見を述べ合い、話し合いを深める学習などは苦手であり、指導者も苦慮するところである。

実技を重視する教科がねらうところは、できたという結果のみでなく、実習の過程で何をどのように学び取り、力として定着させ、それらが生活の中でどのように生かされるかである。単に調理しておいしかった、上手にできて良かったというだけではなく、実習・実験を通して試行錯誤を繰り返す中で、自らの生活を切り開いていけるような力をつけさせたいと願っている。

更に、聴覚障害教育においては、教科指導を通じて言語の習得を図っている。言葉があつてこそ思考がふくらみ表現活動も活発になりうる。語彙数を増やす、自分の言葉で説明できる、考えを的確に伝えられるようになるなど、それらの手だてを各教科で配慮している。獲得した言語が生きた言葉としてどのくらい生活に生かされていくか、言葉の学習が大きな課題となる。

3. 本学級の実態

本学級は、中学部1年男2名、女4名の計6名である。聴力は85dB～120dBの生徒で、聴える程度にも差がある。話が分かるということは、聴力だけでなく、聞く態度がしっかり身についているかどうか、読話する力があるかないかで大きく左右される。6名とも基本的な生活習慣は身につけており、学力は小5～小6程度である。女子3名は、補聴器を十分に活用し、読話力もあり、理解力もある。他の3名は読話が苦手なため、理解がやや遅い。男女2名は、学習態度にむらがあり、興味・関心の有無により、授業への取り組みが変わってくる。

4. 研究主題に沿った指導

(1)主体的に取り組む力を育てる工夫

①学習指導過程の工夫

被服領域の繊維の学習、被服材料性能について理解させるのは、興味・関心の上からも詳しい点がある。現在の日常生活の中では、原材料に触れる機会や経験がほとんどなく、また、衣生活は、外面的には関心を持たれる（ファッション）が、内面的な繊維の特徴や機能などさほ

ど知らなくても生活に支障をきたすことはないからである。しかし、生きていくために欠かせない〈衣〉に関して、自分の着ているものが何からできているか、何のためにどんなものを着たらよいのだろうかなどを知り、工夫して、快適な衣生活を送れるような能力を養っておきたいと考え、題材を設定した。そして、いかに興味・関心を持って取り組めるかを重視して指導計画をたてた。

導入に当たり、身近な衣服に視点をあてた。自分の生活に密着し、生活経験のある教材を取り上げることは、興味・関心を持ちやすく、学習の動機づけになる。動機づけされれば、必然的に学習課題が明確になり、この時間に何の学習をするのかという見通しが持ててくる。また、考えを発表したり、話し合う場面においても、自分の言葉でまとめることができるなどの点で有効である。

展開においては、「なぜだろうか、どうしてこうなるのだろうか」と疑問を感じさせるような指導をし、次に「どうなるだろうか」と自分の考えで予想をたて、実験を通して「なるほど○○である」という結果を実証していく過程を指導の基本とした。配慮事項としては、課題を明確にしておくこと、児童・生徒自身が活動する場面を持つこと、そして、やらされる状態から、おもしろそうだ、やってみようとする能動的な活動に移行していくこと、活動場面においては、意見の発表、実験での失敗、工夫、思わぬ発見、予想が当たったときの喜び、はずれた時の疑問など生徒から発したことに、その都度適切な評価をすることに留意した。一人一人の生徒の能力に合った評価は自信につながり、次の行動へのエネルギーとなると考える。

以上のような観点をもって展開し、本時の課題「綿は他の繊維に比べほんとうに吸水性があるのだろうか」を追求し、「なるほど」という生徒の驚きと成就感が得られるような指導ができることを目指した。

②教材・教具の工夫

ろう学校では、視覚教材の活用を心がけている。できるだけ実物を用意して触れること、実習・実験を多く取り入れることなどは、ことばの定着につながる。いつでも掲示できる絵カード、文字カードの工夫などは、課題をはっきりさせたり、考えを整理したりするのに役立ち、更に、次への学習の手がかりにもなる。板書しながら説明することもできないので、時間の短縮にもカードの掲示は有効である。

③板書計画・ノート活用の工夫

板書する、ノートをとることによって、学習の過程をはっきりつかむことができ、今何をしているかが明らかにされる。本時の身近な衣類の分類では、生徒たちの考えによって移動でき

るカードを用意し、黒板での操作を行い、生徒たちの意見を板書するようにした。更に課題→予想→実験→結果が、黒板の活用によって明瞭になるような工夫を心がけた。生徒のプリント学習やノート整理は、一人一人が自分のペースで分かっていく手だてとして活用させたいと考える。

5 指導の実際

(1)学習指導計画

第1次 布の成り立ち -布・糸の観察- (2時)

第2次 身近な布の種類と繊維の特性 (3時; 本時はその2時目)

第3次 繊維の鑑別 (1時)

(2)本時の目標

- ・身近にある衣服を繊維別に分類させ、繊維の特性について考えさせる。
- ・特に、綿の特性について、観察・実験を通して理解させる。

(3)展開

	学 習 内 容	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	前時学習の復習	・布がどのようにできているかを復習する	
展 開	身近な衣類を繊維別に分類する	・綿・毛・ポリエステル各繊維からなる衣服を観察し分類する ・なぜそのように分類したか 理由を発表する	各自がノートに考えを整理する 衣服名を書いたカードを用意し黒板で発表させる
	課題がわかる	↓ 綿製品は直接肌に触れるものが多い 汗や水を吸うという特性に気がつく 課題 綿は他の繊維に比べ、ほんとうに吸水性があるのだろうか	課題をノートに書かせる
	吸水性の実験	①  A B C の布にスポイトで水を垂らす	綿は下着、毛は学生服、ポリエステルはブラウスと身近な衣服とする
	予想する	予想 ・吸い取る様子はどうだろうか ・ビーカーに水が一番たまるのはどれだろうか 予想を発表する	実験は2グループに別れてする 生徒の活動を重視する
	結果を見て考察する	結果 ・吸水の様子をノートにとる ・ビーカーにたまった水の量を調べる ②肌の水をかけ、綿・毛・ポリエステルの布をあて、水を吸い取る様子を各自で観察する ↓ 綿は他の繊維に比べ、吸水性が大きいことを確認する	ノートに整理させる
課題を解決する	新しい知識を得る	・どうして綿は吸水性が大きいかわかる 3つの繊維にさわる 繊維の長さを比べる 顕微鏡で繊維の断面を見る	観察して何でも思ったことを発言させる
ま と め	次時の予告	・綿繊維製品の弱点を考えてくる	

(4)評価

- 身近な衣服に関心をもつことができたか。
- 綿の特性について理解できたか。

《国語科》（中学校精神薄弱学級の指導）

1. 単元・教材名

書写「月の古名を題材とした年間帯単元」

2. 教科の特性と障害への対応

国語の中で「書写」を特に取り上げた理由は、「書写」の中に学習する態度や身体的なバランス（姿勢）を育む場面があり、なおかつ結果が文字という形で生徒たちの目の前に提示できるという利点があるからである。また、長期間の継続的な思考や抽象的思考の困難な生徒たちにとっては、即時性のある教材を使うことによって「意欲」を高め、「成就感」を1単位時間の中で味わわせやすい。精神薄弱学級の生徒にとって、「書写」において最も難しいのは、「手本を見て書く」ことである。自分の目で見たものを別の用紙に書き写すことは、文字の認知の困難な生徒には特に難題である。しかし、文字の習得のためにも、なぞり書きでない「書写」は必要であり、また、筆順や文字の構成を理解していない生徒にとっては、文字の理解を進めていく上で有効な手段となる。以上のような理由から、書写を通して「表現すること」へのひとつの方向付けとして、年間の帯単元として設定した。

3. 本学級の実態

本学級は在籍者数9名（男子5名・女子4名）からなる中学校精神薄弱児学級である。単純障害の生徒は少なく、ほとんどの生徒が他の障害を併せ持っている。「書写」の時間中平仮名の学習をする生徒が3名、他の生徒が漢字の学習に取り組んでいる。ただし、漢字を学習している生徒もほとんど書き誤りが多い。準備等に関しても、当初は全員指示されないとしなかったが、現在では若干の生徒を残して自ら取りかかるようになっている。

4. 対象生徒の指導

(1)対象制度の実態

対象生徒は中学3年生の男子である。小学校時代は通常の学級に在籍し、日常会話はできる。しかし、適切な言語表現が難しく、会話の中での誤用が目立つ。さらに、文字の表記においては、会話との差が著しい。誤字・脱字が多く、助詞の使い方や音便の表記なども不適切である。結果の正誤が明確な学習課題においては、不安感から、自分の書いたものを見せない、一つの指摘で全部消してしまうなどの拒否行為を示すこともしばしばである。自己中心的で他者への依存心の強い性格のため、自分の誤記を指摘されたり、書き順などを指導しようとするると反抗的態度をとることも少なくない。

(2)主体的に取り組む力を育てる工夫

① 学習指導過程の工夫

対象生徒の実態から、学習に対する主体的な態度を育てるために特に留意する必要があるのは、現時点の能力に応じながら、通常学級に在籍していたという小学校の既習体験からくるプライドを尊重することである。さまざまな行動に潜む社会的な認知欲求の表れとして受容しつつ、基本的な学習に対して根気強く取り組ませるため、教材の質に配慮するとともに個別の課題への取り組みを位置づけるなど学習指導過程に工夫を加えた。つまり、「中学生らしい好奇心に応える教材」の開発と配列を工夫し、この課題に高めながら次教材へ進むという繰り返しと発展性をふまえた帯単元とした。

② 単元化及び教材の工夫

*「書写」帯単元指導の年間アウトライン

「書写」は週1単位時間である。1ヶ月のうち4時間の確保ができる。この4時間の使い方を下記のようにした。

第1週 「月の古名」

第2週 「月の花や行事」

第3・4週 「個別課題」

「月の古名」を取り上げた大きな理由は「中学生らしい好奇心」に応え、「プライド」を尊重して意欲を高めるためである。ふだん聞き慣れないものではあるが、「大人びた（文化度の高い）ものを書く」雰囲気作りに効果があった。また、「月の花や行事」では、季節感を味わうとともに語感を感じさせるよう心がけた。これらのことによって1時間単位の「何をするかの見通し」を持ち、1ヶ月毎の見通しを持つことができた。

③ 成就感と評価の工夫

*評価の観点

- ・準備と片づけが指示なしでできたか
- ・手を汚さなかったか
- ・大きく書けたか
- ・太く書けたか
- ・書き順は正しかったか
- ・文字のバランスはよいか

評価に当たっては、これらの観点をもとに、順位性にこだわらず、また、ひとつの観点にとらわれず行うようにした。過程及び成果を取り上げ、ほめていくという姿勢を常に保持するようにした。もちろん最終的な目標はあるが、それだけにとらわれず柔軟な姿勢で「ほめ、認める」ことを評価の基本にして意欲を高めていくことを中心においた。

* 成就感の体験

書き上げたものの中から生徒自身が1枚選び、提出する。そして、その場で廊下に掲示する。これは、自ら選ぶという自己評価の機会とするとともに、即時的な発表の場を設け、自学級のみでなく他学級の教師・生徒の目による評価を意識させることをねらいとしている。全校的な話題になることが、対象生徒にとって、「書き上げた」という喜びと同時に、特に「社会的認知」の欲求を満足させることにつながっていった。

5. 指導の実際

(1) 目標 今月の月の古名を知り、毛筆で豊かに表現できる。

(2) 展開 (本時は10月第1週目で「神無月」を書写する。)

	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・チャイムと同時に教室に入る ・習字道具を準備する 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示の必要な生徒には準備を援助する ・教師があわてて指示を出しすぎない
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の課題「神無月」を見て読みや語の由来等を知る ・手本にそって指でなぞる ・文字の感覚やイメージを大切にしながら毛筆で書く ・提出用の作品を1枚選び廊下掲示作品を提出する 	<ul style="list-style-type: none"> ・はっきりと分かりやすく読み方を教える ・書き順を手を取って教える ・担当した生徒の援助をする ・生徒が提出用の作品を選ぶのに迷っていたら助言をする
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・片づけをする ・手を洗う 	<ul style="list-style-type: none"> ・まだ書き終わらない生徒があわてないように配慮する ・片づけの難しい生徒には援助をする ・次の予告をしておく

6. 考察 当初、かなりの抵抗感をもっていた対象児も指導をしていくうちに「認められる喜び」を満足できるようになった。今後は少しずつ目標を変化させて、より意欲的に学習する態度を育てていくことが大きな課題である。

V 研究のまとめと今後の課題

本年度は、昨年度教科部会の研究を引き継ぎ、主題に至る過程として、生徒の自発的な活動から意欲的な学習を引き出す方法を探ってきた。心身に障害のある生徒には、過保護な環境で生活を送っている者が少なくなく、保護者と共に社会自立を促していかなければならない。そのためには、あらゆる教育活動の中で対応していく必要がある。特に、教科学習では、社会自立を目指して、意欲的な学習活動を促し、基礎的な体力・知識・技能の習得、社会性の向上などに焦点を当てて考えていくことを大切にしながら、生徒自らの思考の過程を大切に授業研究を中心に進めてきた。

研究を進める過程として、特に、これまでに取り組んできた、あるいは今取り組んでいる教科指導の中から、児童・生徒の意欲が喚起され、主体的な学習が成立する場面等の事例を分析し授業の在り方を探った。それらを基盤に、〈算数・数学の指導〉では、指導案の立案・実践を通して改善点を探り、さらに在るべき指導法を探るという共同基礎研究を重ねた。（A検討）これにより、学習に対する意欲や興味を培うために、手や道具を使う作業的学習を生かすこと、身近な教材・教具を開発させること、障害に応じて活用できる感覚を十分に生かす工夫をする事などが大切であること等が明らかになった。

このような観点を生かして追究した各実践（B検討）では、次のような成果を確認した。〈保健体育・保健分野〉における盲学校の性教育の授業では、男女のからだの違いを考えるのに、男女の教員による触察、立体コピー・拡大図などの教材・教具を工夫することにより興味・関心をもたせるようにした。

〈家庭科・被服領域の指導（布のなりたちと繊維の特性）〉では、いつも何気なく着ている衣類は、肌に近いほど綿が多く、外側にウールが使われている生活から課題を明確にして吸水性の理解を図った。ろう学校では、視覚教材や実験・実習を多く取り入れ、絵カード・文字カードの工夫により板書を整理することによって、課題をはっきりさせたり考えを整理したりさせる授業の展開ができた。

〈国語・書写の指導〉は精神薄弱学級において、中学生としてのプライドを大切にしながら、認められたいという社会的認知欲求を満たし、主体的に学習に取り組む力が出てきた例である。

なお、1年間の研究を通して、次のような課題が残った。

*生徒自身の発見や着想などを柔軟に捉え、指導に生かしていく学習指導過程及び評価の在り方。

*学習意欲を「将来を見通す力」により効果的に結び付ける指導法の工夫。

一人一人が意欲的に活動するための指導の工夫

－見通す力を育てるための指導のあり方－

I 主題設定の理由

研究主題を設定するに当たり、教科（精）分科会を構成する10名の研究員（小学校4名、養護学校6名＜小学部2名、中学部1名、高等部3名＞）が、各学級や学校で担当する児童・生徒の実態を報告し、今年度の研究主題について検討した。

研究主題を決定する上で、日頃の教育実践を持ち寄り話し合った結果、児童・生徒の活動が受け身的である、指示待ちが多い、消極的である等の問題点が多く挙げられた。他に、社会性、人とのかかわり、興味・関心、理解力等の問題点も挙げられたが、協議の結果、生き生きと主体的に活動させるための指導が重要であることを共通理解した。そして、生き生きと主体的に活動させるためには、一人一人の実態に合った適切な指導が大切であることを確認した。

そこで、児童・生徒が、課題や役割が分かり活動全体を見通すことができれば、主体的に活動できるようになるのではないかと考え、「活動を見直す力」に焦点を当て、見通す力を育てるための適切な指導の工夫を主題に今年度の研究を進めることにした。

II 研究の経過と方法

月	内 容	月	内 容
5	研究主題と研究の方法の検討	9	各自の実践事例の検討と授業研究の計画
6	「意欲」「見通す力」についての概念規定、「見通す力」の諸要因を収束技法（KJ法、ストーリー法）にて整理	10	授業研究と教材研究
7	各自の指導事例の検討と今後の研究計画、「見通す力を育てる指導の工夫」について実態・手立て・変容にわけて整理	11	授業研究、研究のまとめと研究報告書の作成
		12	研究発表内容・方法の検討
		1	研究発表内容の確認と資料の作成
8	「見通す力を育てる指導の工夫」の観点について、指導事例を整理し小項目・中項目・大項目に分類	2	研究発表会

研究を進めるに当たり、「意欲」についての先行研究を検討し、「見通す力」の概念規定のためにKJ法、ストーリー法を取り入れた。そして、「見通す力」を育てるための指導上の工夫の観点を出し合い、指導計画を作成し、指導の在り方を検討する授業研究を行うことにした。

Ⅲ 研究内容

1. 見通す力の概念規定について

見通す力は、昨年度の先行研究においては、意欲を育てるための動機づけの一つ（内発的動機づけ）とされている。このことから、見通す力を育てることができれば、意欲を高めることにつながり、児童・生徒一人一人が、意欲的に学習活動ができるようになるのではないかと考えた。

まず、見通す力とはどういうものか、概念を規定するために話し合いを行った。しかし、現在指導している児童・生徒の実態が異なるため、教育内容も違い、見通す力についてのイメージもまちまちであった。そこで、児童・生徒にとって見通す力とは、どういうことか、どのような行動に現れるのかを具体的に行動例を挙げて話し合った。そして、例として挙げられた計52枚のカードをもとに問題解決法としての収束技法（KJ法、ストーリー法）を用い整理した。

2. 収束技法（KJ法、ストーリー法）による概念構成図

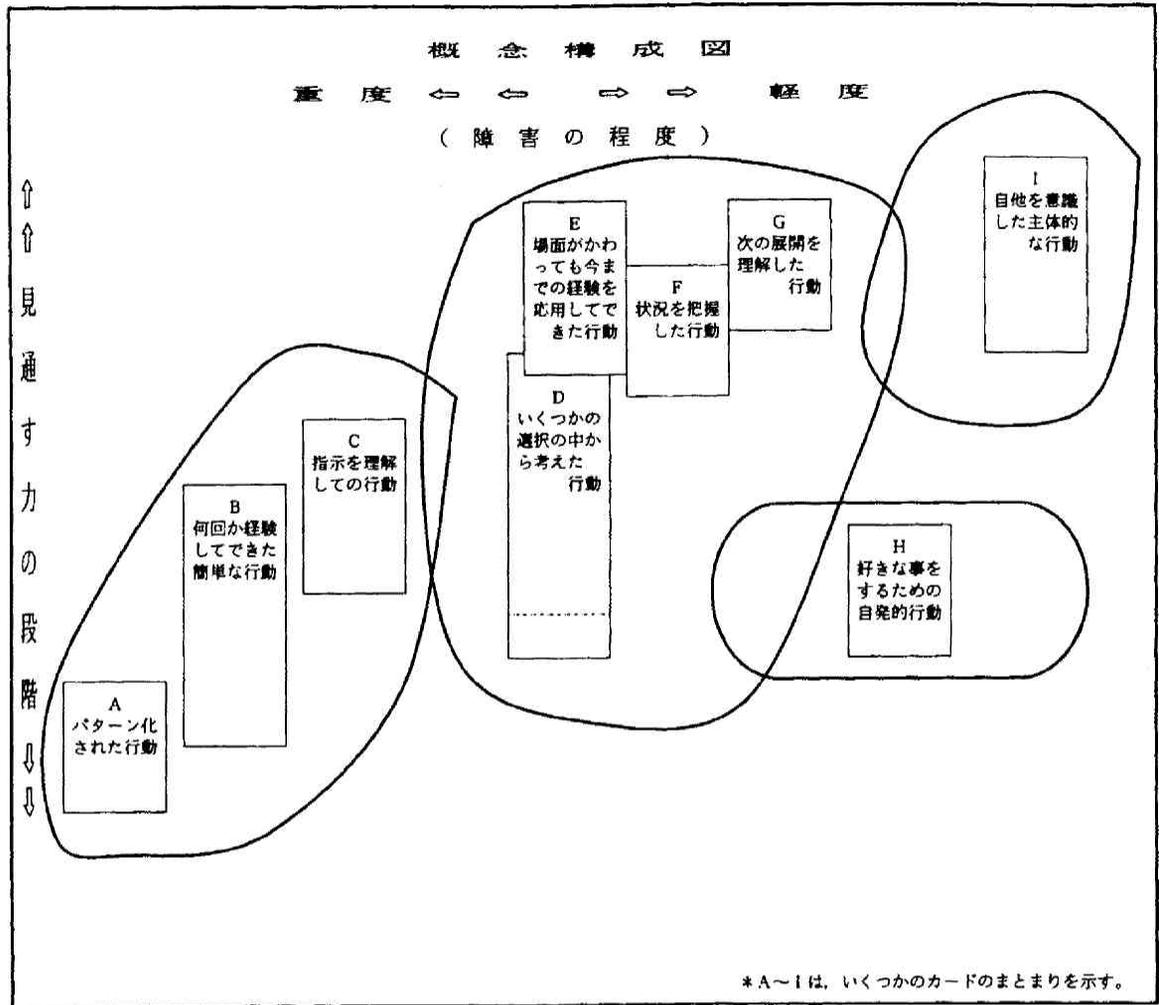
<見通しを持ったと思われる行動のまとめ>

	特徴的な行動	代表的なカード例
A	パターン化された行動	ゴミがなくても、ゴミ捨て場に行くなど。
B	何回か経験してできた簡単な行動	掃除の手順が分かるなど。
C	指示を理解した行動	先生の説明により～ができたなど。
D	いくつかの選択肢の中から考えた行動	調理で切るのに必要な道具が用意できたなど。
E	場面が変わっても、今までの経験を応用してできた行動	掃除でバケツの水が汚れたら取り替えるなど。
F	状況を把握した行動	まわりの様子を見て、～ができたなど。
G	次の展開を理解した行動	遠足の前日、リュックを出し弁当の催促をするなど。
H	好きなことをするための自発的な行動	洗濯機が好きで、わざと服を汚し洗濯機を動かすなど。
I	自他を意識した主体的な行動	作業時、失敗すると次の行程に影響すると理解するなど。

（A～Iにはそれぞれ3～15枚のカードを含んでいる。）

その結果、次のページの図のように見通す力についての概念構成図が作成された。行動Cまでが、重度のグループに多くみられ、行動D周辺にある行動分類は、中度のグループに多くみられる行動である。そして、軽度のグループは、行動Iが多いと考えられる。

図 1



この図から考えられることは、見通す力は段階的に育成されていくこと、及び、一人一人の児童・生徒のそれぞれの発達段階での特徴的な行動でもあることである。

3. 見通す力とは（概念規定）

一般的に「見通す力」と言うと、経験をもとに次に何が起こるかを考えるという予測する力を指すことが多い。本研究の過程では、児童・生徒の様々な行動の中から、「活動全体を見通して行ったと思われる行動」を取り上げることによって、はじめていくつかの段階ごとに分類整理することができた。そこで、「見通す力」を、児童・生徒が自ら進んで行動することまで含め、次のように概念規定することにした。

「目的を持って結果や展開を予測し、自ら進んで行動する力」

4. 見通す力を育てるための指導の工夫

収束技法によって、重度・中度・軽度の児童・生徒の見通しを持った行動が明らかになった。そこで、全員の指導事例と授業案から「見通す力を育てるための指導上の工夫」点を取り上げ、「実態」「手だて」「変容」に分けて検討した。そして、共通する工夫の観点をまとめ、大項目、中項目、小項目に整理した（図2参照）。さらに、授業計画が立てやすいように項目ごとに指導事例を整理した結果、見通す力を育てるための指導計画ができ上がった（図3参照）。

- ①大項目には、実態把握、目標設定、指導内容、指導方法、評価の5項目がある。その中でも見通す力をつける工夫として、特に指導方法の工夫、評価の工夫が多く挙げられた。そこで、「指導方法」「評価」を重点的に取り上げることにした。
- ②指導方法の工夫の中の中項目として、授業形態、指導過程、場面設定、教材・教具の4の柱を考えた。また、評価の中項目としては、即時評価、自己評価、相互評価の3つの柱を考えた。そして、児童・生徒の実態による違いをさらに細かに整理した。
- ③それぞれの中項目に、いくつかの小項目を立てることができた。例えば、場面設定の中には、学習環境、問題場面の設定の2つの小項目を設定した。

持ち寄った資料を詳しく検討をし、KJ法、ストーリー法を応用してまとめた構成図と照らし合わせた結果、重度と軽度の児童・生徒についての指導上の特に配慮すべき観点を次のように整理した。

大項目	中項目	小項目（重度児の指導上の工夫）	小項目（軽度児の指導上の工夫）
指導方法	授業形態の工夫		学習形態
	場面設定の工夫	学習環境	題解決場面の設定
	指導過程の工夫	発展的・系統的 指示・助言	発展的・系統的 指示・助言
	教材・教具の工夫	実態 興味・関心 経験・学習 五感 日常生活 動作化 操作等	実態 興味・関心 経験・学習 五感 日常生活 動作化 操作等
評価	即時評価の工夫	評価のタイミング	評価のタイミング
	自己評価の工夫		場面設定
	相互評価の工夫		場面設定 評価の視点

そこで、重度児、軽度児それぞれについての「見通す力を育てるための指導上の工夫」点を、「指導方法の工夫」「評価の工夫」の観点から、授業研究により検討していくことにした。

授業形態の工夫

◎指導体制

◎学習形態

- ・児童・生徒のやりとりや、会話、能力等を十分発揮できる集団
- ・集団、個人活動の割合

場面設定

◎学習環境

- ・集中、活動、指導しやすい場の設定
- ・机を取り除く
- ・行程の安定する場（児童・生徒の身体に慣れる等）
- ・マットを敷く
- ・音楽を流し雰囲気を作らせる
- ・自分の居場所をはっきりさせる
- ・授業への期待感を抱かせる
- ・目的の場所をはっきりさせる

◎問題解決場面の設定

- ・試行錯誤が必要なもの
- ・考える時間を与える
- ・自分でなんとかできそうなもの
- ・対抗意識
- ・高い課題
- ・個に応じて、解決方法が選択できるもの
- ・驚きや発見

指導過程の工夫

◎発展的 系統的

- ・一定の歩みの授業
- ・スモールステップ
- ・パターン化
- ・繰り返しの指導

◎指示 助言

- ・短く、少なく、簡単に
- ・動作を伴った指示
- ・禁止する言葉を極力控えた
- ・タイミング
- ・声の強弱、高低
- ・教師の演技力

◎発問

- ・児童・生徒わかっている言葉で発問

◎提示

- ・興味を持たせるための提示の工夫

教材・教具の工夫

◎今までの経験や学習がいかせる

◎児童生徒の興味関心に即したもの

◎五感に訴えるもの

◎日常生活に関連あるもの

◎継続して学習できるもの

◎動作化できるもの

◎実態にあったもの（歌等も）

◎親しみやすいもの

◎操作を伴うもの

- ・VTR、スライド、写真
- ・イメージのわくき
- ・ブラックボックス
- ・パネルシアター
- ・文字カード
- ・名前カード
- ・手裏カード
- ・絵カード
- ・十分な枚数

即時評価

◎課題を乗り越えようとしている時、乗り越えた時の評価

自己評価

◎今までの活動を振り返る場面を設定

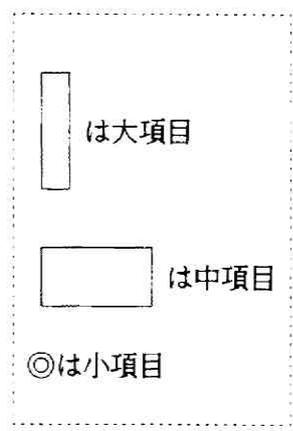
相互評価

◎友達の作品や様子を見たり聞いたりする場面を設定

◎評価の視点を示す

指導方法の工夫

評価



IV 指導事例

1. 生活単元学習「手すき葉書作り」(精神薄弱養護学校高等部)

(1) ねらい

- ①できるだけ自ら考え行動する力を育てる
- ②学級全員で協力して活動する力を育てる
- ③責任をもって作業を行う力を育てる

(2) 対象生徒の実態(高2 A男 てんかん 軽度精神薄弱)

学級委員のA男には集団の核としての役割を期待しているが、積極性に欠け自己中心的である等の課題がある。例えば、学級会で級友の意見を聞いてまとめることが苦手で、役割や責任をもたせられることを嫌い、与えられた課題から逃避しがちである。仕事を頼まれても途中で気が散り中途半端で終わってしまう。意見が食い違くと自分の意見に固執して相手をいつまでも非難したりしてしまうことも多い。

(3) 見通す力を育てる指導の工夫(軽度生徒対象)

<学級全体に対して>

授業 形態	・主体的な行動力を育てるために生徒の考えや意見を尊重しつつ、一人一人に希望する作業工程や分担を考えさせる。
場面 設定	・問題解決の場面を設定して試行錯誤をさせ、次に何をするのか予測させながら目的的行動をとらせる。
教材 教具	・一人一人の生徒が理解できる題材を設定するための興味・関心や能力に合う指導内容(作業工程)を工夫し、「よーしやるぞ」という意欲や、「やればできる」という自信を持たせる。 ・具体物、絵カード、ビデオを活用して視覚的に理解を深めさせる。
評価	・反省会で各自の作業内容や仕事ぶりを発表させたり、互いに評価させたりすることにより、今後の課題について理解を深めさせる。

<A男の見通す力を育てる工夫>

次の点に配慮して、A男に司会・進行をさせながら活動の見通しをもたせる。

- ①授業の挨拶、準備、作業、後片付けなどの時刻を意識・予測させ、号令をかけさせる。
- ②級友の希望する工程や反省を聞きとる言葉かけを考えさせ、話し合いを進めさせる。

(4) 指導計画

1学期は暑中見舞いの葉書を作成し、生徒の実態に合った作業分担や工程の工夫を行う。2学期は年賀状の作成と礼状書き、3学期は学級の協力体制を深め、文化祭で販売活動を行う。

(5) 指導の展開

	学 習 活 動	A男への指導上の留意点	見通す力を育てる手立て
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 ・活動内容の説明 (絵カードやビデオをみる) ・作業工程の希望をとる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進行係を意識させる。 ・時刻に留意させ大きな声で挨拶させる。 ・級友の作業工程の希望をきちんと聞き取らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の始まりを意識させるため元気に挨拶させる。 ・絵カードやビデオで作業工程の理解を深めさせる。 ・作業希望の工程を発表させる。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・①～⑦の作業を分担する。 ①パックを切る, ちぎる ②鍋で煮る ③ビニールをはがす ④ミキサーをかける ⑤紙をすく ⑥アイロンをかける ⑦プレスする 	<ul style="list-style-type: none"> ・用具の準備や全体の作業がきちんと流れているか確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作業分担を検討させ協力体制をつくらせる。 ・準備や作業を協力させ分業体制をつくらせる。 ・手順や仕事ぶりを即時評価して意欲を高める。 ・試行錯誤をさせできるだけ各自に判断させる。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・後片付け ・反省会 	<ul style="list-style-type: none"> ・反省会で、できるだけ級友が感想や意見を発表できるように言葉かけをさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いに協力してすみやかに後片付けをさせる。 ・自己評価や相互評価について適宜、助言する。

(6) 指導の結果と考察

授業の評価は、ねらい①～③について具体目標を設定し、個々の生徒の到達目標を対応させた。A男には授業の開始と終了時の時刻を号令係として意識付けることにより、自分から号令をかけることができた。作業工程の希望の聞きとりは、A男に絵カードで作業工程を確認させることにより、級友一人一人の意見を聞くことができた。また、「紙すき係は一人でいいのでアイロン係にまわってよ。」と、人数の調整も行うことができた。反省会の司会は、聞き方を考えさせることにより、「〇〇君、今日は何をしましたか?」「どうだったか、感想を言って下さい。」と、より円滑に行うことができた。学級活動を学級委員のA男を中心に進めさせることにより、休み時間に手すき葉書作りを他学級の生徒に教えたり、葉書の生産高表の作成や文化祭での販売価格や売り方を考えたりなど、主体的に3学期までの見通しを持ちつつ活動

を進める力を育てることができた。なお、相互評価の司会は今後の課題である。

学級には、A男を含め11名の生徒がいる。障害の軽いA男は、学級での一斉指導の課題はさほど苦勞せずに行える力を持っているため、A男の課題設定には一層の工夫を要した。

今回、A男に対して学習課題を個別に設定し、それを日々意識づけることにより意欲的活動や行動の見通しを培い、A男の主体的な活動を引き出すことができた。これを機会に「できる男、学級のお手本」としてのA男から「主体的に自ら挑戦するA男」を育てていきたい。

2. 国語科の指導 単元名「みつけた みつけた」(小学校精神薄弱学級)

(1) ねらい

- ①生活の中で見つけたことを話したり、簡単な文を視写したりすることができる。(単元のねらい)
- ②自分の課題を把握して、進んで活動することができる。(見通す力育成のねらい)

(2) 対象児の実態(小6 B男 ダウン症候群)

単 元	<ul style="list-style-type: none"> ・ひらがなの読み書きができる。 ・3語文程度の文は、練習すれば、すらすら音読できるようになった。 ・文字に対する抵抗が少なくなり、視写することにも自信を持てるようになってきた。 ・発音はやや不明瞭だが、自分の気持ちや身の回りに起きた出来事を進んで話そうとすることも増えてきている。(2語文~3語文)しっかり話そうとすると、言葉がつかまってしまう。 ・「どこ」「なに」などの疑問詞がまだ理解できていない。 	見 通 す 力	<ul style="list-style-type: none"> ・1単位時間の授業の流れや、自分の課題がわかると自ら進んで意欲的に活動することができる。しかし、課題から外れてしまうことも多い。 ・生活面では、経験を生かし、進んで活動することができるようになってきた。
--------	---	------------------	--

(3) 見通す力を育てる指導の工夫 (軽度児対象)

指 導 過 程	<ul style="list-style-type: none"> ・一定の流れのある授業 授業の展開を①探す ②話す ③書く という流れを設定することにより児童に自分の課題を分かりやすくした。 ・スモールステップ 宝探しゲームの第1段階は①まで、第2段階では②まで、第3段階では③までとすることにより学習の方法や課題を把握しやすくした。そして、①~③の学習の方法に十分親しんでから、「ゲーム」を離れて校庭や校外に学習の場を移すようにした。
教 材 ・ 教	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の興味・関心に即したもの 児童には「文を書く」という少し難しく、興味がわきにくい課題も「宝探し」というゲームを学習の中に取り入れることによって、楽しく学習できるようにした。 果物の模型や日常生活で使っている身近な物をビニール袋の中に入れ、リボンで結

具	ぶことにより、「宝物」という意識を高めたり、興味を持たせるようにした。
評	・即時評価 課題ができた場面、指示を受けなくても次の課題に進めた時にほめる。
価	・自己評価、相互評価 友達の見つけた宝をよく見る。友達の発表をよく聞くようにさせる。 自己評価や相互評価につながるように、指導者が観点（宝を見つけた場所を上手に教えられた、「どこで」がよくいえた等）を示した評価をするようにする。

(4) 指導計画 (12時間扱い)

①宝探しゲームを通して学習する。
(8時間)

- ア. 宝探しゲームのやり方を知る。
- イ. 「ぼくは、どこでなにをみつけました。」の言い方に慣れる。
- ウ. 「ぼくは、どこでなにをみつけました。」の書き方に慣れる。

②校庭や学校のまわりで見つけたことを話したり、簡単な文で書き表わしたりする。(4時間)

(6) 指導の結果と考察

「宝探しゲーム」を通して、探すという活動を取り入れたことで、「何を書けばよいのか」がB男には分かりやすく、楽しみながら進んで学習することができた。

しかし、B男にとっては「宝探しゲーム」の方に関心が強く、見つけた宝の数にこだわる傾向があった。

そこで、次時より、「自分の宝を3個探す(赤川村)」「人の宝を

(5) 本時の展開 <対象児についてのみ抜粋> 6/12

- ①「ぼくは、どこで なにをみつけました。」と話したり にことばを書き入れることができる。(国語科としてのねらい) <視写>
- ②自分の課題を把握して、すすんで活動することができる。(見通す力としてのねらい)

	学習活動	指導上の留意点	見通す力を育てる手立て
導入	・宝探しゲームをする……1 ①今日の宝を知る。 ②隠す所をよく見る。 ③探す。 ④見つけた宝を皿とおぼんにのせる。 ⑤見つけた宝を発表しあう。	・隠す所をよく見るように声掛けをする 宝-10個(果物 6個型や7-1)等 ・皿-10枚	<学習環境> ・プレイルーム ・集団活動と個人活動の組合せ <児童の興味・関心に即した教材・教員の工夫> ・ゲーム化・袋に入った宝
展開	・宝探しゲームをする……2 ①~④同じ ⑤「ぼくは、どこで なにをみつけました。」と、話したり、 <input type="checkbox"/> にことばを書き入れる。(視写) ⑥ ③~⑤を繰り返す。	・ゲームに⑤が加わったことを知らせる ・⑤をやってから、探すことを確認する ・「中」「上」「下」「後ろ」などの言葉を使うような場所に隠すように配慮する ワークシート	<視覚に訴えるもの> ・宝の数と皿の数を同じにして、宝が全部見つかったかどうか、一目でわかるようにした。 ・ホワイトボード に手帳を示しておく。 つ は ぎ に か く さが す じ め に
まとめ	・発表をする ①一人ずつ自分の見つけた宝を発表する。 ②宝の一つを選び、書いた文を大きな声で読む ③今日のゲームで頑張ったことを発表する。 ④次時の予告を聞く	・発表者の方を向きよく聞いている児童をほめ、全員がよく聞くようにさせる。 ・次時もゲームをやることを知らせ、次時への意欲を高める	<自己評価、相互評価> ・自分なりに頑張ったことを発表させる。その後、指導者が観点(すすんで活動できたり、「どこで」がよく書けた等)を示した評価をするようにする。

見つけても取らない」「自分の宝3個分の文作りが正しくできたらみんなの宝(糊り糺)を探す」というように変えたら、前時より落ち着いて、さらに意欲的に学習に取り組めるようになった。

また、学習の場を校庭に移しても、ねらいから外れることもなく目的を持った活動を行うことができた。

教科の授業の中にゲームを取り入れたり、一定の授業の流れを決めたり、単元の中でもスモールステップで段階的に指導していったりすることが、見通しを持って、意欲的に活動できる大きな要因の一つであることが明らかになった。

他の領域・教科等の学習においても、同様の指導の工夫をすることによって、B男は自ら「次は」「この先は」と考えるようになり、見通す力が育っていくものとする。

3. 日常生活の指導「朝の会」(精神薄弱養護学校小学部)

(1) ねらい

- ①一日の学校生活の始まりを理解させる。
- ②今日の学習に意欲や見通しを持った活動を引き出す。 ③活動に楽しく参加する。

(2) 対象児の実態(小6 C男 精神発達遅滞)

今後の学習予定の中に、自分の楽しみにしている行事があると、そのことだけで頭の中が一杯になってしまい、気持が集中できなくなってしまう。「明日、明日」という発言が多いことと普段の行動から推測すると、予定はすべて明日やる活動と、とらえていると思われる。

(3) 見通す力を育てる指導の工夫(重度児対象)

場面 設定	<ul style="list-style-type: none"> ・机を使わず、黒板のすぐ近くに半円形に置いた自分のマークのついたいすに座るなど、黒板や主担当の教師を注目しやすい配置や、児童相互のかかわりを考慮して席順を設定する。 ・自ら進んで朝の会に参加しようと思えるような雰囲気づくりをする。
指導 過程	<ul style="list-style-type: none"> ・一定の流れを繰り返しながら、内容を変化させ高めていく。 ・今日の学習予定については、それぞれの授業の一部を実際にやって見せる。 ・児童の反応に応じての教師の適切な援助・助言を行う。
教材 教具	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会の流れの中で、絵カード、写真、マークなどを用意し、一人一人の児童にわかりやすいものを提示し選択させる。

評価	・一人一人の児童の理解力に応じた評価の観点を設定し、即時評価で確認させる。
----	---------------------------------------

< C男に対して >

平成3年10月より、授業カード別の時間割表を作成し、週時程などの並べかえを指導することで、今日→明日→今週→来週の順に、見通しを持たせる範囲を少しずつ広げてきた。

(4) 指導計画

年間を通して、朝の生活の一環として位置付けている。指導内容として ①あいさつの歌 ②日付、天気 ③出欠席 ④今日の予定（各授業、給食の献立など） ⑤わらべ歌遊び で構成している。司会は一週間単位の当番制とし、司会の仕方は個々の実態に応じて、司会をする児童が分かりやすい方法で行う。

(5) 指導の展開

	学 習 活 動	C男への指導上の留意点	見通す力を育てる手立て
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・「あつまれ」の曲が聞こえたら各自のマークのいすに着席する。 ・当番の児童が、始まりのあいさつと朝の会の歌に合わせて呼名と握手をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会が始まることを意識させるよう、友達への声かけをする。 ・友達の反応を確かめさせながら呼名させ、意識できない友達には自分から握手をしにいく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽、マーク、いすの配置など活動が集中しやすい場の設定。 ・参加意欲が高まるような楽しい雰囲気。 ・一定の流れの授業、「は・じ・め・ま・す」に合わせて手をたたくなどの動作を伴った働きかけ
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・カードを使っての日付、天気、出席調べ。 ・今日の授業予定の絵カードを選び、授業の一部をやってみせる。 ・わらべ歌遊び。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カード遊びなどで間違いないか確認させる。 ・個々の児童の表現方法を大切にさせるよう援助する。 ・授業予定をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的の場所、考える時間などの場の設定、即時評価。 ・集中できる雰囲気や今日の授業予定をイメージ化しやすい内容にする。 ・スキンシップを通して快の表情を引きだし、情緒の安定を図る。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・当番の児童が終わりのあいさつをする。 ・次の授業の教室を再度確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会が終ることを意識させるよう声かけする。 ・次の授業の教室を皆に知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「お・わ・り・ま・す」に合わせて手をたたくなど、動作の伴った働きかけ。 ・わかりやすい言葉での指示。

(6) 指導の結果と考察

C男に対して、実質一年間かけてスモールステップで指導したことや、予定を皆の前で発表したりする場面を設定したことにより、今後の予定に対しての不安感が少なくなった様子から見通す力を向上させることができたのではないかと考えられる。

小学部段階での朝の会の指導では、「楽しい一日が始まるよ」という場の雰囲気大切にすることにより学校生活への期待と意欲が生まれ、その中から少しずつ見通す力が育っていきと考えられる。また、一人一人の児童が現在持っている力を大切にしながら興味・関心のある部分を糸口として、見通しの持てる児童と、持ちにくい児童それぞれについての、時間、場所、内容に関連させながら、朝の会の内容を計画していくことが、今後の課題である。

4. 生活単元学習 単元名「秋を感じよう！」（小学校精神薄弱学級）

(1) ねらい

①どんぐり探し、みかん狩り等の活動を通して、秋を感じることができる。〔単元〕

②言葉や動き等の指示を頼りに、自分のすべき行動を考え、進んで学習に取り組むことができる。〔見通す力を育てるためのねらい〕

(2) 対象児の実態（5年 D男 自閉症）

発問や指示をよく聞けるようになってきたため、学習の発展の予測ができつつある。結果の予測は、日常の簡単な生活場面ではできているようだ。考える力がついてきたが、行動を決定し、実際に行動に移すまで時間がかかる。また、すべての行動が快不快に左右されることが多い。しかし、情緒が安定していれば、課題に意欲的に取り組める。課題のつながりを理解するのは難しいが、次に何をすればいいのかは理解でき、進んで行動に移すことが多くなった。

(3) 見通す力を育てる指導の工夫（重度児対象）

場面 設定	・情緒の安定を促す場として、教室、特に児童の机を中心に授業を行う。 ・一人一人の児童のイメージ色を決め、使う場所に配色する。
指導 過程	・展開の活動を焦点化し、「はじめ」「つぎに」「おわりに」として提示する。 ・指示や発問は、一人一人の児童の理解力に応じた言葉や動きです。
教材 教具	・どんぐり拾いの経験を想起させるために、拾ったどんぐりで作った絵を活用する。 ・どんぐりの衣装を着させたり、どんぐりを箱の中どころがしたりする。
評価	・励ましの仕方の工夫をする。気持ちを代弁したり、楽器を使ったりする。

・授業の終わりに発表会を設け、自己評価、相互評価させる。

(4) 指導計画（14時間・本時6/14）

- ①「柿を絵にしよう」→校内の柿を収穫し、絵や版画にする。
- ②「銀杏の葉やどんぐりを探しにいこう」→実物を使って絵にしたり、遊んだりする。
- ③「みかん狩りをしよう」→歌を歌ったり、校外へみかん狩りに行ったりする。

(5) 指導の展開

	学 習 活 動	C男への指導上の留意点	見通す力を育てる手立て
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・始まりの挨拶をして秋の学習を知る。 ・本時の学習内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「手は膝に」の声かけをして意識をさせる。 ・D男のめあての説明は絵カードを見せながら、分かりやすくする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・始まりの合図を意識させるために、目を合わせるまで待つ。 ・「はじめに」うた、「つぎに」ひろう、「つぎに」ころがると絵カードと共に板書する。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ①楽しく手遊びをしたり、元気に歌を歌ったりする。 ②どんぐり拾いを再現し、想起する。 ③どんぐりの動きを真似する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊びや歌では、楽しくリズム打ちができるように手を叩く。 ・壁面パネルにつけるどんぐりは子供達の拾った物にする ・どんぐりを箱に入れてころがす際、歌を歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手本をする児童の動きをよく見るように声かけをする。自分の楽器を準備させるために、楽器の場所にD男の色を付けておく。 ・自分から席を立とうとするまで待つ。立とうとしない時は、「とる」と声かけをする。 ・動きの分かる大きな箱を用意する。ころがす動作を大げさにして意識付けをする。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・どんぐりの動きを発表し合う。 ・次回の学習内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の発表の仕方を見るように順に発表する。 ・椅子や机を一人で運ばせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タンブリンで拍子を打たせたり手を叩いたりして評価をさせる。 ・みかんを疑人化して、みかん狩りをすることを知らせる。

(6) 指導の結果と考察

〔成果のあったと思われる工夫〕

児童の活動を「うたう」「ひろう」「ころがる」の3つに焦点化したため、次に何をすればよいのかが分かり、見通しをもった活動ができていた。D男には表出言語がないため、意

思を伝える手段は視線の動きやしぐさ等が主である。そのD男の視線が教師の動きを追っていたことから課題を理解していたと思われる。また、活発に活動でき、表情には笑顔も見られた。課題を見通したことが、意欲を喚起したのだと推測される。

説明の際に活用した絵カードは、それを手がかりに考えることを促した。また、絵カードと文字を効果的に組み合わせた提示もすべての児童に対応できて有効であった。

〔課題として残ったこと〕

見通しを持たせるためには、児童のやりたいという気持ちを生かした言葉かけや援助を心がけなければならないと感じた。指導者は、児童が、次の展開を予測しようと考えている時間を確保すること、児童が、予測できるかできないかを見極めた援助をすることなどを配慮する必要がある。また、児童の意欲を喚起するためには、一人一人の児童の成長に応じた課題設定をしていくことが大切である。

V まとめと今後の課題

本分科会は、見通す力を育てるための指導の在り方について研究を進めた。「見通す力」を育てることにより、意欲的な活動を促すことができるのではないかと考えたからである。

1 まとめ

(1)K J法、ストーリー法を応用して探ることにより、「見通す力」についての、本分科会としての概念が規定できた。

・概念構成図を作成したことにより、児童・生徒の発達段階ごとの見通しをもったと思われる特徴的な行動が明らかになり、これを参考に指導を行うことができるようになった。

(2)見通す力を育てるための指導計画ができた。

・概念構成図と指導計画を照らし合わせることで、指導の重点化が容易に行えるようになった。

(3)見通す力を育てるための指導の在り方について、指導上の工夫の観点を基に、重度児・軽度児各2例ずつ授業研究を行い、特に次のことを確かめることができた。

①授業形態の工夫：＜学習形態＞では、軽度生徒には、友達の希望や感想を聞いたり、協力して活動できるように集団活動と個人活動を組み合わせた学習を組んだりして、生徒同士のやり取りや会話が多くなるようにしたりすると、活動の見通しをもちやすくなった。

②場面設定の工夫：＜学習環境＞では、指導者の指示や提示が見やすいように、児童の位置や、指導者の立つ位置に配慮したり、児童のイメージカラーやシンボルマークを使って、

見通しが持ちやすい環境を設定することができた。

<問題解決場面の設定>では、軽度生徒は、試行錯誤させることにより、誤りの原因・理由を自覚し、行動の見通しを持つことができ、意欲を高めることにつながった。

③指導過程の工夫：以下の例に示すように、一定の流れのある授業をすることにより、児童生徒が意欲的に、かつ精神的にも安定し落ち着いて学習できるようになった。

・指導事例4では、展開の活動を焦点化し、「はじめ」、「つぎに」、「さいごに」というように、活動の区切りを付けて提示することにより、児童が見通しを持って、意欲的に活動できることを促すことができた。

・指導事例2では、(7) 探す (イ) 話す (ウ) 書く というように、展開の活動を焦点化し、指導者の指示をできる限り少なくし、児童に「次に何をやるか」を考えさせることにより、自ら進んで学習に取り組むようになった。

・指導事例1では、授業を進めるごとに、作業工程 ((7) 牛乳パックを切る (イ) 窯で煮る (ウ) ビニールをはがす (エ) ミキサーをかける (ウ) 紙をすく (カ) アイロンをかける (キ) プレスする) の分担をすることにより、各自が自分の分担だけでなく他の行程との関連も意識し、互いに協力しながら作業全体の進み具合を考えるようになった。

④教材・教具の工夫：児童・生徒の実態や興味・関心に合わせて、カード、ビデオなどを利用して課題を確認させるたことにより、次の課題を見通すことができ、意欲を持って学習に取り組んだ。また、教科の授業の中に児童・生徒の興味・関心のある活動を取り入れたところ、期待感を持って楽しみながら意欲的に活動し、自分から次はどうすればよいかと考えるようになった。

④評価の工夫：重度児、軽度児共にねらいに応じた即時評価が、次の活動意欲を喚起させるために大変有効であった。また、軽度児同士での相手のよいところを認めるなどの相互評価では、評価の観点や方法を適切に提示するとよかった。

2 今後の課題

(1) 見通す力の概念規定については、各段階の特徴的な行動間の関連を生理するために、さらに多くの見通す力が育った事例を収集し、意欲との関係について検討する必要がある。

(2) 見通す力を育てるための指導計画については、実態把握、目標設定指導内容の工夫など未検討の観点について、中項目・小項目を挙げて整理する必要がある。

(3) 見通す力を育てるための指導の在り方については、中度児についても、工夫の観点を基に焦点を決めて授業研究を進め、指導上の重要な工夫点を検討し整理する必要がある。

児童・生徒の障害の状態に応じた

養護・訓練の指導

－『意思の伝達』の状態の改善のための指導－

I 主題設定の理由

本年度の養護・訓練部会は、ろう学校、精神薄弱養護学校及び小学校の精神薄弱学級、難聴学級の担任10名によって構成されている。障害の種類や程度が異なる学校、学級を担当する研究員のメンバーの中で、養護・訓練の研究について共通のテーマを設定するために、まず各学校、学級ごとの養護・訓練についての指導事例を持ち寄り、指導上の問題を出し合った。

そこで出された問題は、次のようである。例えば、指示がなかなか理解できない、時々パニックを起こして指導が難しい、オウム返し様の言葉が多く会話が成立しない、言葉や文字がなかなか覚えられない、養護・訓練の位置づけや指導の形態などが明確でない、などであった。問題を整理すると、①意思の伝達、コミュニケーション能力の獲得に関するもの②心理的適応に関するもの③精神薄弱養護学校の養護・訓練（発達の偏り）のとらえ方に関するもの3つに分けられた。以上の課題を検討する中から、全研究員の事例に共通する「意思の伝達」を中心課題として研究を進めることとし、心理的適応と養護・訓練の教育課程における位置付け等については、研究を進める過程で、配慮しながら検討していくこととした。このように、「意思の伝達」に視点を当て、指導事例を通し、「意思の伝達」の基本的なとらえ方、その状態を改善する指導法の在り方等について、明らかにすることとした。

II 研究の方法と経過

1 研究の方法

- (1) 基礎研究：各学校における養護・訓練の指導計画、指導事例を持ち寄り、共通理解を図り、研究主題を検討した。さらに、「意思の伝達」に関する指導事例を持ち寄り、障害種別ごとの指導上の課題について、共通するところと異なるところを出しあって研究課題を絞り、副題を決定した。
- (2) 研究主題に基づく研究：盲学校、聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領に示されている養護・訓練の内容のうち、「意思の伝達」の4つの項目について学習指導要領解説等をもとに理解を深め、養護・訓練のとらえ方、用語等を明確にさせた。また、KJ法を活用し、「意思の伝達」の状態を改善する指導上の配慮事項等について整理した。

(図1, 参照)そして, 指導事例を基に, 実践に直結する討議を深め, 具体的な指導にどう生かせるかを検討した。

2 研究経過

5～6月……………養護・訓練の事例報告, 研究テーマの検討と決定

7～8月……………「意思の伝達」に関する指導事例の検討, 主題の考え方のまとめ

9～11月……………指導事例の指導案の検討, 指導事例の指導経過の報告と原稿の検討

12～2月……………報告書の原稿の校正, 研究発表の内容の検討, 準備, 練習, 発表会

Ⅲ 研究の内容

1. 「意思の伝達」のとらえ方

意思の伝達にとって基本的に大切なことは, 自分の気持ちを伝えたい, 分かってほしいという心と, そのような相手の気持ちを理解しようとする心が, 相互に交流することである。つまり, 一方的な意思の伝達ではなく, 相互に意思を伝え合い, 交流することが, 自らを高めるとともに, より豊かな外界とのかかわりを可能にするし, また, より豊かで楽しい生活を実現させる。このような視点から, 意思の伝達をとらえ, 一人一人の児童・生徒の意思の伝達への意欲を喚起するとともに, 必要な知識や技能・態度を養うことが, 教育活動における具体的な目標になると考える。しかし, 実際は, 教師の意図やねらいが先行し, 児童・生徒に通じていないこともある。教師は, このような状況を真剣に受け止め, より分かりやすい相互伝達の手段や方法を模索し, 実践していかなければならない。そして, 児童・生徒の意欲を喚起し, 意思の伝達の状態の改善を全面的に図る実践を展開する必要がある。

意思の伝達の状態は, 一人一人の児童・生徒の障害やその示す実態によって異なっている。聴覚等の感覚障害が主障害の事例では, 基本的な人との関係が成立していれば, 概念の形成を図りながら, 発声・発語及び聴能訓練などの基礎的指導を通して, 言葉を段階的に習得させ, さらに体系的な言葉の獲得と活用につなげていくことができる。

主障害が精神薄弱や自閉的傾向の事例では, 一人一人の児童・生徒の示す表情や行動, 言葉が多様であり, 一面的な理解では, 児童・生徒の実態を正確に把握することは困難である。したがって, これらの児童・生徒の意思の伝達の状態を改善するためには, 音声言語だけによるかかわりに頼るのではなく, 身振り・手振りなどの動作, さらには, 絵カード, 文字カードなどの多種多様な教材・教具を工夫, 開発するとともに, これらを活用した指導法についても改善をしていく必要がある。

障害が重複する児童・生徒の事例では、児童・生徒の示すわずかな表情の変化や思いがけない行動にこそ、問題解決への手掛かりが存在していることがあり、これらの適切な把握と対応が極めて大切となる。

2. 「意思の伝達」の状態を改善するための指導で大切なこと

(1) 的確で多面的な実態把握

一人一人の児童・生徒の実態を的確に実態把握するためには、多面的な視点からその全体像をとらえることが大切である。一人一人の児童・生徒が示す表情や行動及び言語活動などをきめ細やかに観察し、それらのもつ意味を内面的側面からも分析する必要がある。そして、発語や身体の動きも自由に発現し難い状態にあったり、あるいは発現はあっても相互の意思の伝達に有効に使えない状況にあたりするなど、実際的なコミュニケーション能力の実態を科学的に把握する必要がある。

(2) 信頼関係の形成

指導を進めるに当たっては、児童・生徒が自ら表現したいという気持ちを高め、主体的に伝えようとする意欲を育てるような配慮が大切である。そのためには、教師と児童・生徒との共通体験を通し共感を深め、信頼関係を形成し、表現することへの自信を持たせることが重要である。そして、この信頼関係を基盤とした指導を展開することによって、指導の効果を一層高めることができると思う。

(3) 系統的な指導計画の作成と指導

指導に当たっては、次の観点を基にした系統的・継続的な指導計画と実践・評価が不可欠であり、それらを教師間で共通理解することが大切である。

① 指導課題の明確化

適切な実態把握を基にして、言語を含めたコミュニケーション能力の発達的な分析に加え、児童・生徒の将来の変容の見通しや、家庭、地域社会での生活なども考慮して、現在における最も必要な課題は何かを明らかにする必要がある。

② 適切な指導内容の選定

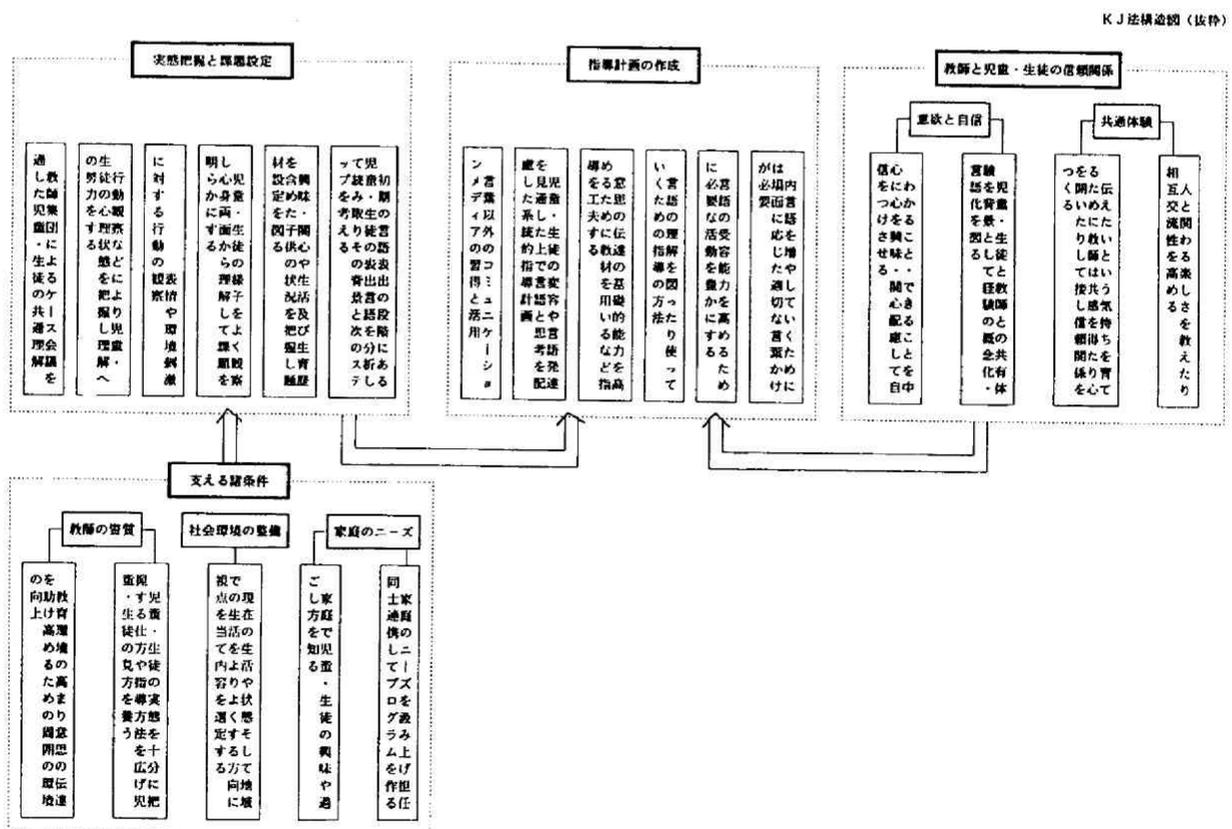
明らかになった指導課題を基に、「意思の伝達」の指導の重点を設定するとともに、具体的な指導項目を選定する。その際、児童・生徒の興味・関心や日常生活との関連などを重視し、指導の継続性・系統性や日常生活への活用・応用などを配慮することが大切である。

③ 指導方法の工夫

実際の指導に当たっては、適切な言葉かけや言語表出の場を多く設定するなどの言語環境を整えたり、言語理解を促進する教材・教具や、概念形成やコミュニケーション能力の基礎を育む教材・教具を開発したりするなど、環境設定と教材・教具の工夫が重要である。また、授業内容や形態を検討し、各授業ごとの指導のねらいを明確化し、またそれらの関連を考慮することが大切である。

以上のような「意思の伝達」のとらえ方と指導の基本的な考え方を基にして、「意思の伝達」の状態を改善するための指導法について、指導事例を通して検討した。

図1. 「意思の伝達」の状態を改善するための指導で大切なことは何か



IV 指導事例

1. 事例1〔自閉症児の理解言語能力を高める指導〕（小学校精神薄弱学級）

(1) 児童の実態

- A児 小学6年生（12才）男，〔障害 自閉症，精神薄弱〕
- 音声による表出言語は「パパ」「ハ」のみである。問いかけなどに対しては、「パバパー」「パー」などの声の調子や高さ，速さ，長さなどを使い分け，意思表示をする。しかし，自分から友達や教師へ働きかけることはほとんどない。
- 毎日の学級活動で繰り返される日常的な指示は大体理解できる。
- 平仮名五十音が書ける。自分の名前が書ける。
- 身体を動かしたり，歌おうと口をもごもごさせたりしながら，学校放送の音楽番組「ワンツードン」を，喜んで見る。

(2) 指導計画

① 目標

- 事物の弁別力等，認知，言語の基礎的能力を育てる。
- 内言語を増やす。
- 人への関心を高める。

② 方針

- 課題に応じた教材・教具を用意し，見通しをもたせ，意欲的に課題に取り組ませる。
- 課題が終了する度にほめる，はげますなど賞賛しながら，できたという喜びを共感しながら進める。
- 日常生活に密着した題材を選定し，文字学習を進める。

③ 授業の形態

- 小集団によるグループ指導（リトミック，生活発表，運針等の学習）
- 個別指導（言葉の学習）

④ 年間計画

- ア 1～2音節程度の言葉と絵カード・単語カードのマッチングをする。（1学期）
- イ 3音節の単語や濁音等の絵カードと単語のカードのマッチングをする。（2・3学期）
- エ 絵カードを見て，文字を書く。（2・3学期）
- ウ 言葉の指示や，単語カードを読み，いろいろな場所に置かれている具体物を持ってくる。（2・3学期）

エ 年間を通して、リトミック、運針、本の読みきかせ、生活発表などをする。

⑤ 指導内容

ア 教師の話す言葉を聞いて絵カードを取らせる。次に絵カードを見て単語カードとマッチングさせる。また、単語カードを見て絵カードとマッチングさせる。（絵カードや文字カードは、教室にある身近な物や食べ物から始め、徐々に種類を増やしていく。）

イ 絵カードを見て、語頭だけ抜けている語句カードに文字を入れさせる。同じような方法で、語中、語尾の文字を入れさせる。最後に絵カードを見て単語として文字を書かせる。

ウ 単語の文字カードを見せ、読ませてから「もってくる」「だす」などの指示をし、行動させる。

(3) 指導の実際

① 本時までの指導経過

平仮名五十音は、言葉かけで書くことができるので、1音節語の「て、め、き」などの絵カードと文字カードのマッチングをした。その後、絵カードを見て文字で書く練習をした。さらに、「みみ、はな、くち」などの2音節、「はさみ」などの3音節の単語へと進めた。

本時までには、身近で慣れた物であれば3音節の単語カードは取れるようになってきている。書くことは、2音節の単語は大体書けるようになってきている。3音節については、抜けているところに書き入れるという段階である。その際、まだ自信がないらしく、教師の確認を得てから書くという様子が見られた。（本時では濁音のつく単語も導入した。）

② 指導の展開（指導案1、参照）

(4) まとめと今後の課題

学習の成立に「ワンツードン」の音楽番組のビデオが効果的であった。学習課題に積極的に取り組み、その課題が終わると、自分から「テレビを見たい」と指さして要求するようになった。また、喜んで意欲的に学習に取り組むことにより、着実に物の名称の理解が広がり、内言語も増えてきた。言葉の獲得により、事物が明確化され、指示されたことの理解がよくなり、情緒も安定してきている。

現在、文字を読む学習は、4音節以上の単語は頭の部分の2音節の文字で反応しているようにも見受けられる。また、言葉を聞いて文字を書くという学習については、3音節以上の単語の場合、最初の文字が記憶されず途中で消えてしまうようである。

今後は、さらに具体物等の教材を活用し、「言葉の学習」を繰り返し継続させることによ

り、言葉の基礎となる認知力や記憶能力を育てていきたい。そして、本児の興味・関心を基に成就感をたくさん体験させ、学習意欲を高めながら要求表現や人とのかかわりを育てるために、文字学習（言葉の学習）の指導内容・方法を工夫しながら進めていきたい。

（指導案 1， 小学校精神薄弱学級）

題材	絵カードを活用した単語の読み・書き																		
題材の設定理由	A児は、身振りや指さしを中心であり、音声言語によるコミュニケーションは難しい。A児にとって文字を習得することは、内言語を増やし、意思の伝達手段を拡充し、生活する力や人との関係を豊かにしていくものと考え、この題材を設定した。																		
本時のねらい	絵カード・単語カードのマッチングを図る。																		
	指導内容	主な活動	教材・留意事項	時間															
導入	<ul style="list-style-type: none"> あいさつ 名前を呼ぶ。 絵カードの言葉による弁別 	<ul style="list-style-type: none"> 返事をする。 言葉の指示で絵カードを取る。 	(絵カード)	2分															
本展	<ul style="list-style-type: none"> 絵カード・単語カードのマッチング <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px 0;"> いす、のり、はさみ、りんご、みかん </div> <ul style="list-style-type: none"> 文字を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 絵カードを見て、単語カードを取る。 単語カードを見て、絵カードを取る。 絵カードをみて、穴あきのところに文字を書き入れる。 <table border="1" style="margin: 10px auto; text-align: center;"> <tr> <td>か</td><td></td><td>り</td><td>は</td><td></td></tr> <tr> <td></td><td>ど</td><td>ん</td><td></td><td>さ</td></tr> <tr> <td>ん</td><td>う</td><td></td><td>み</td><td>み</td></tr> </table>	か		り	は			ど	ん		さ	ん	う		み	み	<ul style="list-style-type: none"> (絵カード) (単語カード) 誤答の場合、1文字ずつ指さして読ませる。 書けない時は教師がゆっくり単語を発音して援助する。 	17分
か		り	は																
	ど	ん		さ															
ん	う		み	み															
時開	<ul style="list-style-type: none"> 単語カードを読み、指示を聞いて行動する。 	<ul style="list-style-type: none"> はさみの単語カードを読んで、教師の「はこの中からとる」の指示を聞いて取る。 																	
まとめ	おわり	<ul style="list-style-type: none"> あくしゅをする 	<ul style="list-style-type: none"> ほめたり、認めたりの言葉かけをする。 	1分															
評価	単語カードを見て、カードがとれたか。 絵カードを見て、単語カードがとれたか。 絵カードを見て、文字が書き入れられたか。																		

2. 事例2〔難聴児の基礎的能力（聴く・話す）を育てる指導〕（小学校難聴学級）

(1) 児童の実態

- B児 小学4年生（10歳）男〔障害 感音性難聴（聴力レベル, 右96dB, 左94dB）〕
- 発音は, サ行とタ行の混同や音の取り違えがある。（例えば「引き算」を「みちざん」, 「真理さん」を「まいちゃん」等）
- 発音と文字が一致していない。（例えば「べんきょうで 100点で ないたい。」→「勉強で 100点に なりたい。」）
- 1年生時, 偏食が原因で給食の始まった5月頃から登校拒否気味になったこともあった。

(2) 指導計画

① 目標

- 意思の伝達力を向上させる基礎的能力（聴く・話す等）を, より確実に身に付けさせる。

② 方針

- 身体遊び, ゲームや製作遊びを取り入れながら, 課題に集中できるようにさせる。
- フリートーキング等, 自由な雰囲気の場合を大切に, 正しい表現を身に付けさせて, 自信を持たせる。
- グループ学習を通して, 友達同士の交流を深めさせる。

③ 授業の形態

- 個別指導（発音, 聞き取り, 言語・適応指導等を, 在籍校で指導する。）
- グループ指導（劇, 音楽, 生活発表指導等を, 本校へ通級させて指導する。）

④ 年間計画

- 年間を通して……遊戯療法や音楽療法的要素を取り入れた遊びや, フリートーキング等をする。
- 1学期……音楽遊びを中心として, 言語指導, 適応指導を行う。
- 2学期……劇遊びを中心として, 言語指導, 適応指導を行う。
- 3学期……作文指導を中心として, 言語指導, 適応指導を行う。

⑤ 指導内容

- 手指・身体遊び……迷路, すごろく, カルタ, ピンポン, めんこ, こままわし, 的当てゲーム, 縄跳び, 等
- 製作遊び……折り紙, 工作, 昆虫（かまきり等）・ジグソーパズル等

- 音楽遊び……リズム学習「めだかおどり」（オリジナル曲）等
- 劇遊び……「かさこじぞう」等
- 言語指導……発音指導，聞き取り指導，作文・読解指導（「学習発表会」等の作文，当該学年に準じた「長文読解」のプリント学習等）

(3) 指導の実際

① 本時までの指導経過

- 音楽遊びを通して，歌や鍵盤ハーモニカ等の演奏をした。
- 劇遊びを通して，みんなと一緒に協力し合って，表現活動を行った。
- 会話を通して，情緒に落ち着きがみられるようになった。

② 指導案（指導案2，参照）

(4) まとめと今後の課題

本児は，身体遊びや製作遊びなどを通して，工作的な技能の広がりや深まりを持てるようになり自信を付けてきた。製作した物の説明や身体遊びの感想などの表現が沢山できるようになってきた。しかし，それらは本児からの一方的なものが主であった。そこで，相互的な意思の伝達を成立させ，より豊かな会話が必要であると考え，自由な会話に加え，教師による対話形式による口頭作文の指導を導入した。（以下指導例，参照）

<p>指導前の作文 「ぼくがまちがえたらだめなのでぼくは，できたので，うれしかったです。」</p>	
<p>教師の言葉かけ 間違えたら，何がだめなの。 絵だけかな。音はどうなるのかな。 絵と音が。 その時，○○君は，どんな感じがしたかな。 ドキドキしただけかな 上手にできたんでしよう。</p>	<p>B児の応答 えーっと。絵がだめなの。 ふーん あーっ 合わなかったんだ。 うーんとね。ドキドキしたよ。 うん，そう。できたよ。</p>
<p>指導後の作文 「ぼくがまちがえたら絵と音が合わなくなってだめなので，ぼくはドキドキでした。でもじょうずにできたので，ぼくはうれしかった。」</p>	

本児は，作文指導や会話指導を通して自分の気持ちや考えを整理し，それを相手に伝えられるようになるなど，意思の伝達に関する指導が充実する過程で，情緒も安定してきた。また，語い数も増えるとともに，相互的な会話を通し，友達関係も改善され，何事にも積極性がでてくるなど，本児の全体像が大きく変容してきた。

今後も，より良い人間関係を育成しながら，会話を豊富にしていくための指導を大切に進めていきたい。

(指導案 2、小学校難聴学級)

題 材	「学習発表会」の作文				
題材設定の理由	自分の考えや気持ちを文章化することは、その気持ちや考えを整理し、より正確に表現する力を向上させると考える。そこで、本児にとって楽しかった「学習発表会」を題材とし、興味・関心を高めながら、作文に取り組ませたいと考えた。				
本時のねらい	前時に書いた「学習発表会」の作文を、より詳しく、分かるように表現（文章化）させる。				
本 時 の 開 演 の 開 学 習	指 導 内 容	主 な 活 動	留意事項、教材・教具等	時 間	
	導 入	自由な会話 工作（弓矢作り）	・会話を楽しみながら、 弓矢を作る。	・楽しい雰囲気を作る。 （竹ひご、たこ糸、ハフ）	10分
	展 示	作文をより詳しく、 分かるように表現さ せる。	・前時に書いた作文を 音読させる。 ・書かれた場面を会話 で深める。 ・前時の作文を基に、 改めて作文させる。	・じっくりと、はっきり した読み方をさせる。 ・その時の状況と気持ち を思い出させる。 （作文用紙）	30分
	ま と め	まとめと次時の予告	・出来上がった作文を 音読させる。 ・前時の作文と比較さ せる。	・じっくりと、はっきり した読み方をさせる。 ・文章表現の違いに気付 かせ、良くなった箇所を 大いにほめてやる。	5分
	評 価	<ul style="list-style-type: none"> ・「学習発表会」の時の気持ちを、詳しく表現することができたか。 ・場面の様子を分かりやすく表現することができたか。 			

3. 事例3〔自閉症児の状況理解力や意思の伝達能力を高める指導〕（精神薄弱養護学校）

(1) 生徒の実態

- C児 高等部2年 女子〔障害 自閉症 精神薄弱〕
- 言語理解については、日常的で簡単な指示に対して、理解し対応ができる。
- 表出言語については、2語文以上ある。自発的な言葉は、「～する」「～しない」という2種選択の状態にとどまっていることが多い。声かけや問いかけには「オウム返し」で答えることが多い。選択をするように問いかけると考えて答えることはあるが、選択肢のない問いかけには、疑問詞をそのまま答えるか、または無言のままである。自分からは、疑問詞を使わず、助詞は抜け落ちることが多い。
- 人との会話の中で要求を伝えたい時、尋ねたい時、意思を伝えたい時など、場に応じた言葉が使えない。また、理解言語として持っていたとしても、その場で想起し、表出することがなかなかできない。

(2) 指導計画

① 目標

長期……・人とのかかわりの中で自分の状態を安定させながら、生活を楽しむ。

短期……・状況の理解力を高め、経験を広げる。

・単純な「オウム返し」の会話から、場に応じた簡単なやりとりの言葉を使えるようにする。

② 方針

○ 課題に向かうことに心理的に重圧感や疲労感をもちやすいので、能力的には易しい課題も盛り込みながら、課題学習にリラックスして向かっていけるようにする。

○ 自分の気持ちを表す言葉を大事にし、育てていく。

○ 言語環境に関わる配慮事項については生活全般で取り上げる。

③ 授業の形態……個別学習（週2時間）

④ 年間計画

1学期……興味のある題材を取り上げ、課題学習に向かうことに慣れる。

2・3学期……指導内容は、因果関係を含むもの、時間の経過とともに状況の変化を含むものに課題を広げていく。

※年間を通して、状況を形容する言葉を会話に盛り込み、働きかける。学期・月予定に関する事など、本児の気になることについては、具体的に提示し、視覚的にも確かめられるように絵、文字、写真等を使って状況理解を助ける。

⑤ 指導内容

○ 絵カードにどんなことが書かれているか、話し合ったり文章カードを選んだりする。

○ 絵カード、文章カードを用いて、時間の経過や因果関係の状況を一連の流れで表すような系列（順序）を構成する。（以下、系列画と記す）

○ 文字カードを用いて、文章構成をする。

(3) 指導の実際

① 本時までの指導経過

カードを活用した学習に取り組み始めてから、自分の興味のあるものを見つけ、自分でカードを取り出してくることがみられるようになった。系列画の学習については、一つの行動や学習を順序を追って考える経験を積むことにより、順序に従って並べることは比較的できるようになり、絵カードの状況を表す言葉や文もスムーズに出るようになってきて

いる。

② 指導案（指導案3，参照）

（指導案3，精神薄弱養護学校）

題 材		系列画（絵カード，文章カードを使って）			
単元設定の理由		状況理解の幅を広げるためには，因果関係を含めた状況の変化をとらえていく必要がある。絵カードで単純な流れでの状況理解することに慣れてきているので，次の段階として，接続詞等を活用して状況と状況をつなぐことに慣れるようにしていきたい。その前段階として，絵カードを文章カードに置き換えて，状況の変化・流れをとらえる学習を設定し，次の段階の接続詞の学習へとつなげていきたい。			
本時のねらい		状況の変化・流れを文章によってとらえる。			
		指 導 内 容	主 な 活 動	配慮 教材・教具	分
本 時 の 学 習	導 入	・あいさつ	・着席する。	・導入に配慮する。	2
	展 開	・絵カードの説明をさせる。 ・順序に従って並べさせる。 ・文章カードを読ませる。 ・絵カードと文章カードのマッチング，文章カードを順に従って並べさせる。	・4枚のカードを順不同で一枚ずつどんな絵か話す。 ・4枚のカードを順序に従って並べる。 ・順不同に4枚の絵カードに即した文章カードを読む。 ・絵カードを置き，状況を表す文章カードを合わせて置く。 ・文章カードだけで順序に従って並べる。	・絵カード ・文章カード	15
	ま と め	・学習の成果を評価する。	・できあがったカードを見ながら話し合う。		3
評 価		状況の変化や流れを文章によってもとらえることができたか。			

(4) まとめと今後の課題

本児の実態から考察すると，本児は，原因と結果の関係がつかめず，一つ一つの出来事をつなげていくことに弱さがあるのではないかと。そして，その背景には時刻や時間に関する感覚や認識のつまずきがあるのではないかと。そのことによって，本児の状況理解の仕方や意思の伝達の仕方は制約を受けざるを得ないのではないだろうか，という観点を基に，指導内容を設定した。

指導を積み重ねることにより，教師との共感関係が深まり，それを基盤に，教師の働きかけた言葉を別の場所であたかも模倣するように使うということも少しずつ出てきた。例えば，

会話の中で今まで使わなかった「どこの〇〇」などの疑問詞を使い、本児の思いが教師に直接伝わったり、会話の中で「かわいい」、「すき」など、自分の感情を言葉として伝えてきたりするような場面が少しずつ出てきた。このように、「状況の理解」「意思の伝達」に焦点を当てた指導を通し、徐々に本児の変化、成長がみられつつある。

今後も、本児が状況を理解する力を更に高め、意思の伝達がよりスムーズになり、また生活がより生活しやすくなるような指導の継続が必要である。

4. 事例4〔聴覚障害を併せ有する精神薄弱児の指導〕（精神薄弱養護学校）

(1) 生徒の実態

○ D児 中学部3年生（15歳） 男

〔障害〕精神薄弱、感音性高度難聴（左右とも平均聴力レベル90dB）

○ 発声（マママ…）はあるが発語はない。母親とは簡単な手話で意思の伝達を図ることもあるが、学校では一部の会話を除いて、主に身振りによるコミュニケーションを図っている。また、一斉指示はよく理解できないので、どうしても行動が遅れがちになったり、個別の指示を与えないと行動に移れないという面が多い。

○ 視覚からはいる刺激には敏感で、動作の模倣や、絵に描かれているものと実物とのマッチングはできる。

(2) 指導計画

① 目標

ア 音声言語に代わる手段によって指示を理解させ、行動をまとまりのあるものとして連続して行えるようにさせる。

イ 音声言語に代わる手段によって本児の要求を提示させ、自発的な行動を促し、他者との相互的な意思の伝達を、円滑に図れるようにさせる。

② 方針

ア 目標のアについて、めくり絵カードの使用を通して手順を理解させ、行動させることを当面の指導とする。

イ 指導の場面（「作業学習」）ばかりでなく、絵カードの使用をさらに応用することによって、他の学習場面や家庭生活に応用させる。

③ 授業及び指導の形態

作業学習において、ほぼ同じ学習課題を有する生徒を4～5人のグループに分け、一人

の教師が担当する。指導時間は週1回2時間である。

④ 年間計画（作業学習における「調理学習」において）

4月～5月 味噌汁作り（本児における道具・器具の使用能力や作る手順の理解力等についての実態把握を図る。友達や教師との協力関係を育てる。）

6月～7月 味噌汁作り（技術面の指導に重点をおく。）

9月～ 味噌汁作り（作る手順を理解させ、指示を受けずとも一人で作業を進める。）

⑤ 指導内容

ア 絵カードに描かれている品物や動作を理解させ、マッチングさせる。

イ めくり絵カードの使用方法について把握させる。（絵カードにあった行動を起こし、終了後はそれをめくって次の絵に従う。）

ウ 一連の動作が終了したら、自発的に絵カードを教師に手渡させ、報告させる。

※ 絵カードの種類は、

○ 道具・材料編－包丁、まな板、手鍋等。

○ 動作編－「包丁を洗う」、「まな板を洗う」、「お湯を沸かす」、「…豆腐を切る」等の動作を絵で表したもの。

(3) 指導の実際

① 本時までの指導経過

「味噌汁作り」の指導を始めた当初は、友達と協力して作るという展開だったため、手が空いてしまったり、教師の指示なしには次の行動に移れなかったり、本児の課題が達成されにくいというようすがみられた。そこで家庭との話し合いも加えて、ある動作を連続して一つの行動を組み立てていくこと、そのために音声言語の指示に代わる手段を活用することを検討し、絵カードを導入した。

② 指導案（指導案4、参照）

(4) まとめと今後の課題

意思の伝達を円滑に進めるためには、ボディランゲージやカード等の視覚に訴える刺激は有効な手段である。本児の場合は、音声言語による指示に代わるコミュニケーションカードを導入したことで、その後の家庭での指導（買い物や調理などの手伝いの場面で）に応用してもらい、成果をあげてきている。しかし、本事例に関しては、今後検討を続けなければならない問題が残されている。

第一には、絵カードを本児が要求を提示する際の手段として用いるには、どう展開していく

かということである。相手の意思を受けだけでなく、自己の考えていることを伝えるという意思の伝達の相互性を具現化するためのカードの使用方法を本児に早急に習得させる必要がある。第二には、本児の意思の伝達能力を高め、より高次の指導のあり方を探らなくてはならない。それは、複数の相手との意思の伝達を図るためには、身振りだけでなく、共通性の高いコミュニケーション手段を習得させることが不可欠と考えられるからである。例えば、カードや表という手段の存続、絵カードだけでなく文字の導入、さらに、より直接的に本児のコミュニケーション能力を高める指導の工夫である。

(指導案, 4 精神薄弱養護学校)

題 材	味噌汁作り				
題材設定の理由	本児の保護者から家庭で味噌汁作りをさせたいという要望がでていた。また、本児に対しては教師の指示がなくとも、動作を連続させて行えるようにという課題があったため、材料や用具の難易度も考慮して味噌汁作りを設定した。				
本時のねらい	1枚の絵カードに描かれている行動を終了したら、ただちに自分でそれをめくって次の絵カードに描かれている行動をする				
本時の展開	指 導 内 容	主 な 活 動	教材・留意事項	時間	
	導 入	所定の場所への移動と役割の理解	調理室への移動が済み次第、それぞれの位置で活動開始する。	絵カード、包丁・まな板などの道具、味噌、豆腐などの材料	15分
	展 開	絵カードを見ながらの調理	カードを見ながら、道具・材料を揃え、さらに調理をする。	一枚の絵カードに描かれた動作が完了する直前に、その絵カードをめぐる動作を教員が例示する。	65分
	習 込	活動の終了の確認	絵カード一式を持って教師の所に報告に来る。	活動すべてが終了する直前に、絵カードを持ってくることを教員が例示する。	10分
評 価	○絵カードに指示されている行動ができたか。 ○絵カードを自分でめくって次の行動に移れたか。				

V 研究のまとめと今後の課題

養護・訓練の指導は、一人一人の児童・生徒の障害の状態や発達、経験等に即して適切な課題を個別に設定し、指導内容や方法を選定することが基本である。この基本に立ち、今年度の養護・訓練部会は、「意思の伝達の状態を改善するための指導」という主題を設定し、研究を進めた。事例研究を研究の中心に据え、その中から意思の伝達の発達段階に応じた課題を抽出

し、指導計画を作成し、指導を進めていく際に大切にしなければならない点、障害の状態の違い等に応じた工夫点などについて以下のように考察した。

まず、基本的な理解として、意思を相互に伝達させるためには、伝え手と受け手との両者の間に共感関係が生まれていることが不可欠である。障害が重度である児童・生徒の意思の伝達の状態は特にとらえにくいのが、生活や活動の場で表れるわずかな表情や身振りでの表出を見逃さずに観察し、意思を的確に受け止め、生徒に分かりやすい手段を用いて理解したということ伝えることが大切である。また、このような事例では、安定した情緒のもとに表情や身振りでの意思の表出に意欲を持たせる工夫が大切である。

表情や身振り、態度等での意思の伝達は可能だが、話し言葉での相互の伝達が難しい事例においては、言語発達 の順序性を配慮した指導法の工夫が大切である。話し言葉には、話された途端にすぐにその音声が消えてしまうという、記憶するにははなはだ不利な性質がある。この不利な点を補い、音声言語による意思の伝達を高めるためには、課題に注意を集中させたり、教師の言葉かけに耳を傾けさせたり、興味・関心を持続させたり、発声・発語機能を向上させたりすることが大切である。例えば、音声での理解を助けるための実物、写真、絵、文字、文章カードなどの視覚的教材を活用するなど、事物と言葉、行動と言葉を結び付ける指導方法の工夫が必要である。

音声言語により日常生活での意思の相互伝達が一応は可能になっても、言語による細かな心情を理解したり、自分の経験を的確に言語表現できるようになるためには、形容詞などの感情表現や価値判断を含んだ言葉や助詞など、日本語に固有の機能語などを習得しなければならない。そのためには、児童・生徒の体験を基にした口頭作文や日記指導などが有効である。さらに、言葉で思考を組み立て、自分の考えを言葉で表現できるようにするためには、経験を広め、豊かに感じる心を育てていくことが大切である。

今年度の研究の大きな収穫の一つは、様々な障害の状態についての事例を数多く検討できたことである。現在、学校には様々な障害を併せ有する児童・生徒が増加している。これらの児童・生徒一人一人が意欲的に生活を送り、自発的なコミュニケーション活動を行えるようにするためには、他障害の指導事例からも指導内容・方法の工夫を学ぶ必要があり、個別に抽出した指導時間の確保なども大切である。今後とも、一人一人の児童・生徒の意思の相互伝達の状態に即した個別指導計画を立て、適切な指導内容・方法の工夫を積み重ねていくことが大切である。